

# 平安京右京五条四坊六町跡・西京極遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇七―二〇

平安京右京五条四坊六町跡・西京極遺跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所







# 平安京右京五条四坊六町跡・西京極遺跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、マンション新築工事にともなう平安京跡・西京極遺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

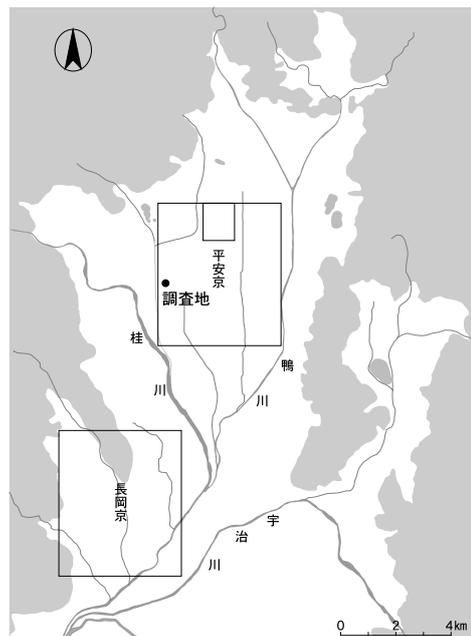
平成 20 年 4 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京五条四坊六町跡・西京極遺跡
- 2 調査所在地 京都市右京区西院安塚町 100 番
- 3 委 託 者 セントラル総合開発株式会社 大阪支店  
上席執行役員 支店長 丸尾善則
- 4 調査期間 2008 年 1 月 21 日～2008 年 3 月 19 日
- 5 調査面積 415 m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 西森正晃
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「山ノ内」・「西京極」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子、遺構の一部は、調査担当者が撮影を行った。
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 西森正晃・柏田有香（分担は目次に記した）
- 18 編集・調整 児玉光世・近藤章子・山口 眞



(調査地点図)

# 目 次

1. 調査経緯	.....	(西森)	1
2. 位置と環境	.....	(西森)	2
3. 遺 構	.....	(西森)	3
(1) 基本層序と遺構の概要	.....		3
(2) 第1期 奈良時代から中世の遺構	.....		8
(3) 第2期 古墳時代中期から後期の遺構	.....		8
(4) 第3期 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構	.....		16
4. 遺 物	.....	(柏田)	28
(1) 遺物の概要	.....		28
(2) 土器	.....		28
(3) 石器	.....		38
5. ま と め	.....	(西森)	46

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区第1期全景(北から)
		2	1区第2期全景(北から)
図版2	遺構	1	1区第3期全景(北から)
		2	2区第1期全景(北から)
		3	3区第1・2期全景(北から)
図版3	遺構	1	2区第3期全景(北から)
		2	3区第3期全景(南から)
		3	竪穴住居192(北から)
図版4	遺構	1	竪穴住居243(北西から)
		2	竪穴住居246(北西から)
図版5	遺構	1	竪穴住居242・300(北東から)
		2	溝245(南東から)
図版6	遺構	1	土坑221(東から)
		2	土坑268(北西から)
		3	土坑337(東から)

#### 4 土坑 333 (北西から)

- 図版 7 遺物 土器類  
図版 8 遺物 土器類  
図版 9 遺物 土器類  
図版 10 遺物 石器類

## 挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査前全景 (南から)	2
図 3	作業風景	2
図 4	調査区配置図 (1 : 400)	2
図 5-1	調査区断面図 (1 : 80)	4
図 5-2	調査区断面図土層名	5
図 6	第 1 期遺構平面図 (1 : 200)	6
図 7	第 2 期遺構平面図 (1 : 200)	7
図 8	建物 1 実測図 (1 : 50)	9
図 9	建物 2 実測図 (1 : 50)	9
図 10	建物 3 実測図 (1 : 50)	10
図 11	竪穴住居 192 実測図 (1 : 80)	11
図 12	竪穴住居 190 実測図 (1 : 50)	12
図 13	竪穴住居 189 実測図 (1 : 50)	13
図 14	竪穴住居 215 実測図 (1 : 50)	14
図 15	溝 186 実測図 (1 : 80)	15
図 16	土坑 187・柱穴 198 実測図 (1 : 50)	15
図 17	土坑 184 実測図 (1 : 50)	16
図 18	第 3 期遺構平面図 (1 : 200)	17
図 19	竪穴住居 300 実測図 (1 : 80)	18
図 20	竪穴住居 243 実測図 (1 : 80)	19
図 21	竪穴住居 216 実測図 (1 : 50)	21
図 22	竪穴住居 216 変遷図 (1 : 200)	21
図 23	竪穴住居 242 実測図 (1 : 50)	22

図 24	竪穴住居 250 実測図 (1 : 50)	23
図 25	竪穴住居 188 実測図 (1 : 50)	24
図 26	竪穴住居 246 実測図 (1 : 80)	25
図 27	竪穴住居 246 支柱穴・貯蔵穴断面図 (1 : 50)	26
図 28	竪穴住居 246 土器出土状況 (北東から)	27
図 29	溝 245 断面図 (1 : 50)	27
図 30	奈良時代から平安時代土器実測図 (1 : 4)	28
図 31	古墳時代中期から後期土器実測図 (1 : 4)	30
図 32	竪穴住居 243・300 出土土器実測図 (1 : 4)	32
図 33	竪穴住居 188・216・242・250 出土土器実測図 (1 : 4)	33
図 34	竪穴住居 246 出土土器実測図 (1 : 4)	34
図 35	溝 245 出土土器実測図 (1 : 4)	36
図 36	柱穴 320・322 出土土器実測図 (1 : 4)	37
図 37	石器実測図 (1 : 2)	39
図 38	石器実測図 (1 : 2、1 : 4)	40
図 39	第 3 期遺構変遷図 (1 : 500)	46
図 40	第 2 期遺構変遷図 (1 : 500)	47

## 表 目 次

表 1	遺構概要表	8
表 2	遺物概要表	28
表 3	土器観察表	41
表 4	石器観察表	45



# 平安京右京五条四坊六町跡・西京極遺跡

## 1. 調査経緯

今回の調査は、セントラル総合開発株式会社によるマンション新築工事に伴う発掘調査である。調査地は、京都市右京区西院安塚町 100 番に位置し、平安京右京五条四坊六町跡にあたる。また、近年の調査成果によって、遺跡範囲が見直された、弥生時代から奈良時代にかけての集落遺跡である西京極遺跡にも含まれる。発掘調査に先立ち、京都市文化財保護課による試掘調査が実施され、竪穴住居、溝、土坑、柱穴が確認された。その結果、委託者に対して発掘調査の指導があり、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、調査を行うこととなった。

調査を実施するにあたり、周辺の調査成果に基づいて、弥生時代から平安時代に至る遺構の確認と、歴史の変遷を明らかにすることを目的とした。

調査地の調査面積は 415 m<sup>2</sup>である。調査地は、元々駐車場であったため、アスファルトを除去した後に重機による表土剥ぎを行った。盛土、旧耕作土を除去したところ、地山上面で重複関係が見られる遺構を多数検出した。これらを形状、方位、遺物出土状況などから、3時期にわけて調査を行った。調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居が良好な形で確認できたことから、現場の公開を行い、市民への普及に努めた。なお、調査終了間際に、京都市文化財保護課の指導により、2箇所の追加調査を行ったため、当初の調査区を1区、追加調査区を南から2区・3区とした。

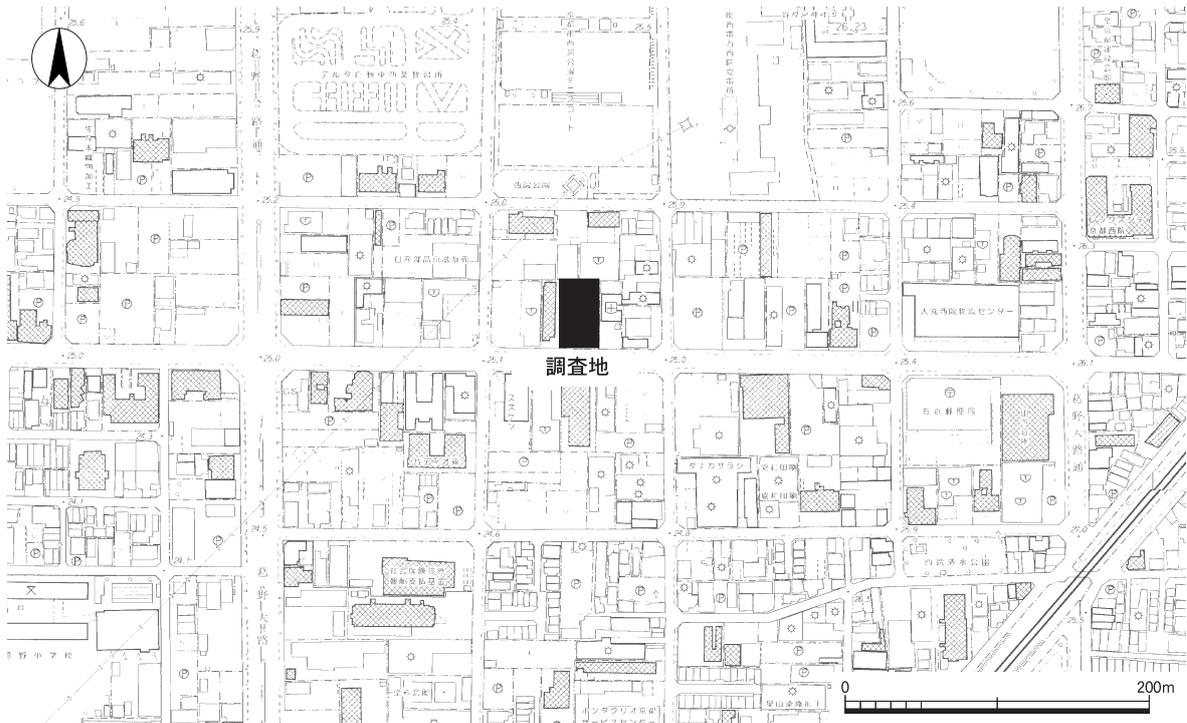


図1 調査位置図 (1 : 5,000)



図2 調査前全景（南から）



図3 作業風景

## 2. 位置と環境

調査地周辺は、現在では平坦な地形が広がっているが、これは、平安京遷都以来、現在に至るまでの人為的な改変と、河川の土砂運搬によるところが大きい。周辺地域の平安京以前の旧地形は、旧御室川と旧紙屋川との扇状地が広がり、2つの川は五条通以南で合流、広大な沼（湿地）を形成していた。扇状地内には、数多くの小

河川が流れて、微高地を形成していったと考えられる<sup>1)</sup>。

周辺の調査成果については、当地が西京極遺跡の範囲に含まれる契機となった、平安京右京五条三坊十四町跡の調査報告<sup>2)</sup>と、弥生時代の竪穴住居を数多く確認した右京六条四坊二町跡の調査報告<sup>3)</sup>に詳しい。以下、西京極遺跡に関しての主要な調査成果のみ取り扱う。

五条大路跡の調査<sup>4)</sup>では、縄文時代後期・晩期の遺物が出土しており、当地の歴史が縄文時代に遡ることが判明している。また、遺跡の範囲外であるが、右京六条三坊七～十町跡の調査<sup>5)</sup>でも、縄文時代から奈良時代にかけての流路跡を確認している。

弥生時代中期以降は、活発な活動が見られ、右京六条四坊二町跡の調査<sup>6)7)</sup>では、中期から後期にかけての竪穴住居、土坑

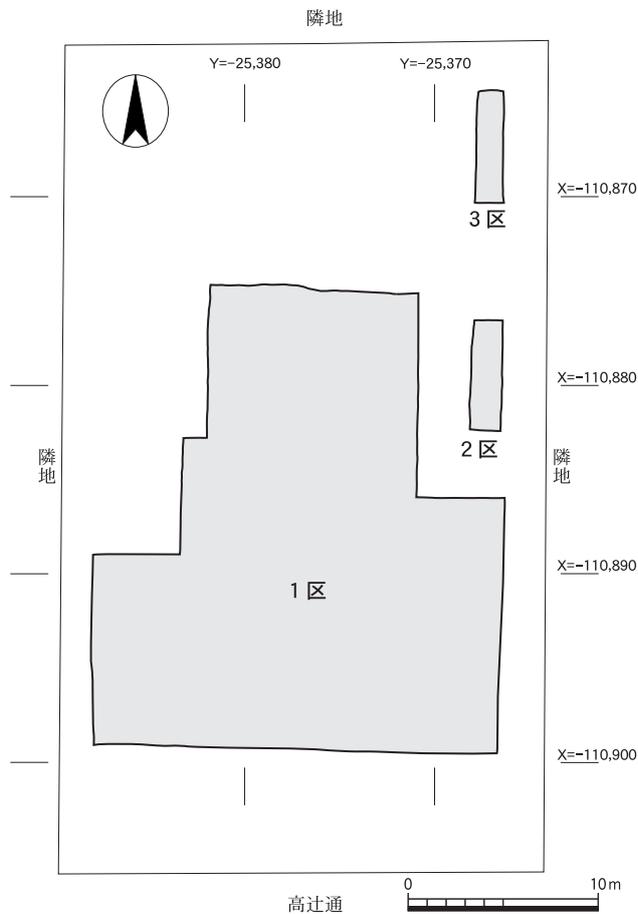


図4 調査区配置図（1：400）

が見つかっている。右京六条四坊七町跡<sup>8)</sup>の調査でも、中期の溝、竪穴住居、後期の竪穴住居、古墳時代の竪穴住居が確認されている。前述した右京五条三坊十四町跡<sup>9)</sup>の調査では、中期から後期にかけての方形周溝墓が確認されている。

古墳時代では、前期の生活の痕跡は希薄であるものの、中期から後期にかけて数多くの痕跡が見られる。右京六条四坊八町跡<sup>10)</sup>の調査や五条四坊十二町跡<sup>11)</sup>の調査で、当期の竪穴住居、溝、掘立柱建物が確認されており、続く飛鳥・奈良時代にかけても掘立柱建物・総柱建物・竪穴住居が見つかっている。

#### 註

- 1) 横山卓雄「京都盆地の自然環境」『平安京提要』角川書店 1994年
- 2) 木下保明・西森正晃『平安京右京五条三坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-7 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 3) 柏田有香『平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-30 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 4) 山下秀樹編『平安京右京六条四坊九町跡・五条大路』京都文化博物館 1991年
- 5) 『平安京跡研究調査報告第20輯 平安京右京六条三坊』財団法人古代学協会 2004年
- 6) 前掲註3)と同じ
- 7) 上村和直・西大篠 哲「平安京右京六条四坊・西京極遺跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 8) 2005年、(財)古代学協会による調査
- 9) 前掲註2)と同じ
- 10) 柏田有香『平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-14 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 11) 伊藤 潔「平安京右京五条四坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序と遺構の概要(図5、表1)

調査前の状況は、駐車場であったため、GL-0.6 mまでが、現代盛土であり、以下、近現代の耕作土、床土、近世耕作土、中世耕作土となり、GL-1.2 mで2.5Y5/3黄褐色シルト～2.5Y6/2灰黄色シルトの地山となる。また、地山は北西に向かって緩やかに下降しており、北西部では、地山の直上に5Y5/2灰オリーブ色シルト包含層が堆積している。遺構は、全て地山上面で検出している。中でも竪穴住居は、弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけて11棟、古墳時代中期から後期にかけて7棟の計18棟を確認している。

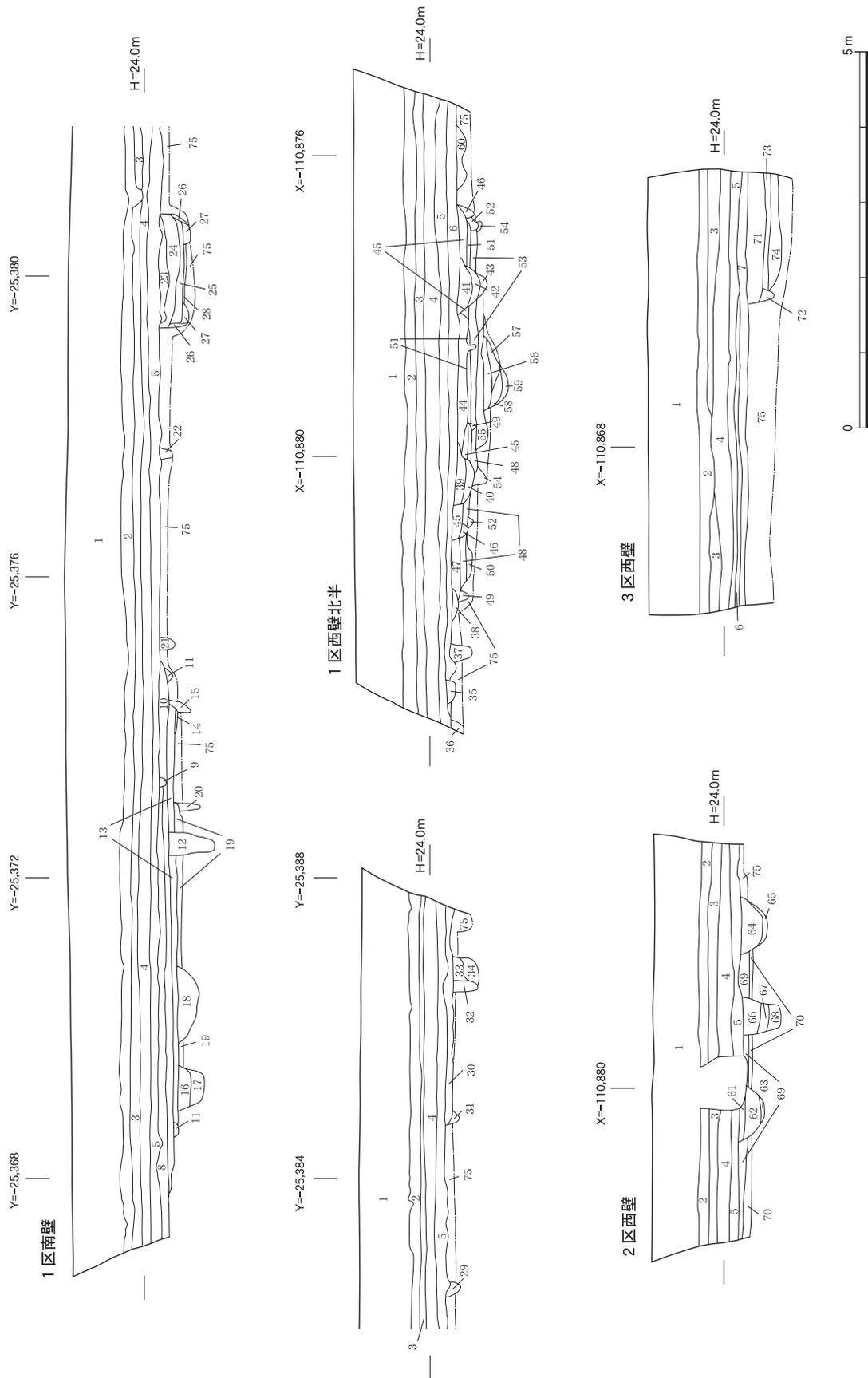


图 5-1 調査区断面图 (1 : 80)

1	現代盛土 攪乱		
2	2.5Y3/1 黒褐色シルト (近現代耕作土)		
3	2.5Y3/2 黒褐色シルト (近世床土)		
4	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (近世耕作土)		
5	10YR3/2 黒褐色シルト (中世耕作土)		
6	5Y4/2 灰オリーブ色シルト (包含層)		
7	2.5Y4/1 黄灰色シルト		
8	10YR4/1 褐灰色シルト (竪穴住居190)		
9	5Y6/1 灰色微砂		
10	10YR5/1 褐灰色微砂 (竪穴住居216)		
11	2.5Y4/2 暗灰黄色微砂 (竪穴住居216)		
12	2.5Y3/1 黒褐色シルト (柱穴388)		
13	10YR4/3 にぶい黄褐色微砂 (竪穴住居216)		
14	2.5Y5/3 黄褐色微砂		
15	2.5Y4/1 黄灰色シルト		
16	2.5Y5/1 黄灰色シルト (溝367)		
17	10YR5/4 にぶい黄褐色微砂		
18	10YR4/4 褐色微砂 (溝365)		
19	10YR5/2 灰黄褐色微砂 (竪穴住居216)		
20	2.5Y5/2 暗灰黄色シルト		
21	2.5Y4/1 黄灰色シルト		
22	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (土坑119)		
23	2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト、炭化物中量含む		
24	2.5Y4/1 黄灰色シルト、炭化物を中量含む		
25	5Y4/4 にぶい赤褐色微砂、炭化物・焼土極めて多量に含む		
26	2.5Y4/2 暗灰黄色微砂、炭化物多量に含む		
27	10YR4/1 褐灰色シルト、炭化物中量含む		
28	10YR4/4 褐色微砂		
29	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト		
30	5Y4/2 灰オリーブシルト (竪穴住居189)		
31	5Y5/1 灰色シルト		
32	10YR4/1 褐灰色シルト		
33	10YR4/1 褐灰色シルト、黄褐色シルトをブロック状に含む (柱穴219)		
34	10YR5/6 黄褐色シルト		
35	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト		
36	2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト		
37	2.5Y3/2 黒褐色シルト (溝193)		
38	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (溝145)		
39	5Y4/1 灰色シルト		
40	5Y3/2 オリーブ黒色シルト (溝177)		
41	2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト (溝178)		
42	2.5Y4/1 黄灰色シルト		
43	5Y5/1 灰色シルト		
44	2.5Y3/2 黒褐色シルト (土坑144)		
45	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (竪穴住居228)		
46	2.5Y4/2 暗灰黄色微砂		
47	2.5Y4/1 黄灰色シルト		
48	5Y4/1 灰色シルト		
49	2.5Y4/3 オリーブ褐色微砂		
50	2.5Y4/1 黄灰色シルト、オリーブ褐色シルトをブロック状に含む (竪穴住居303)		
51	2.5Y4/1 黄灰色シルト		
52	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色微砂		
53	10YR4/1 褐灰色シルト (竪穴住居300)		
54	2.5Y5/2 暗灰黄色シルト		
55	10YR4/3 にぶい黄褐色微砂		
56	10YR3/1 黒褐色シルト		
57	2.5Y4/2 暗灰黄色シルト		
58	2.5Y4/1 黄灰色シルト		
59	2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト (溝245)		
60	5Y4/1 灰色シルト (溝8)		
61	5Y4/1 灰色シルト		
62	5Y3/2 オリーブ黒色シルト (溝177)		
63	2.5Y5/2 暗灰黄色シルト～微砂		
64	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト (溝178)		
65	5Y5/1 灰色シルト		
66	2.5Y5/2 暗灰黄色シルト		
67	2.5Y4/4 褐色微砂、炭化物微量含む (土坑383)		
68	7.5YR4/4 褐色微砂、炭化物微量含む		
69	2.5Y3/1 黒褐色シルト		
70	2.5Y4/1 黄灰色シルト、黒褐色シルトをブロック状に含む (竪穴住居388)		
71	10YR5/1 褐灰色シルト		
72	2.5Y4/2 暗灰黄色微砂		
73	2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト (竪穴住居384)		
74	2.5Y3/1 黒褐色シルト		
75	2.5Y5/3 黄褐色シルト～2.5Y6/2 灰黄色シルト (地山)		

図 5-2 調査区断面図土層名

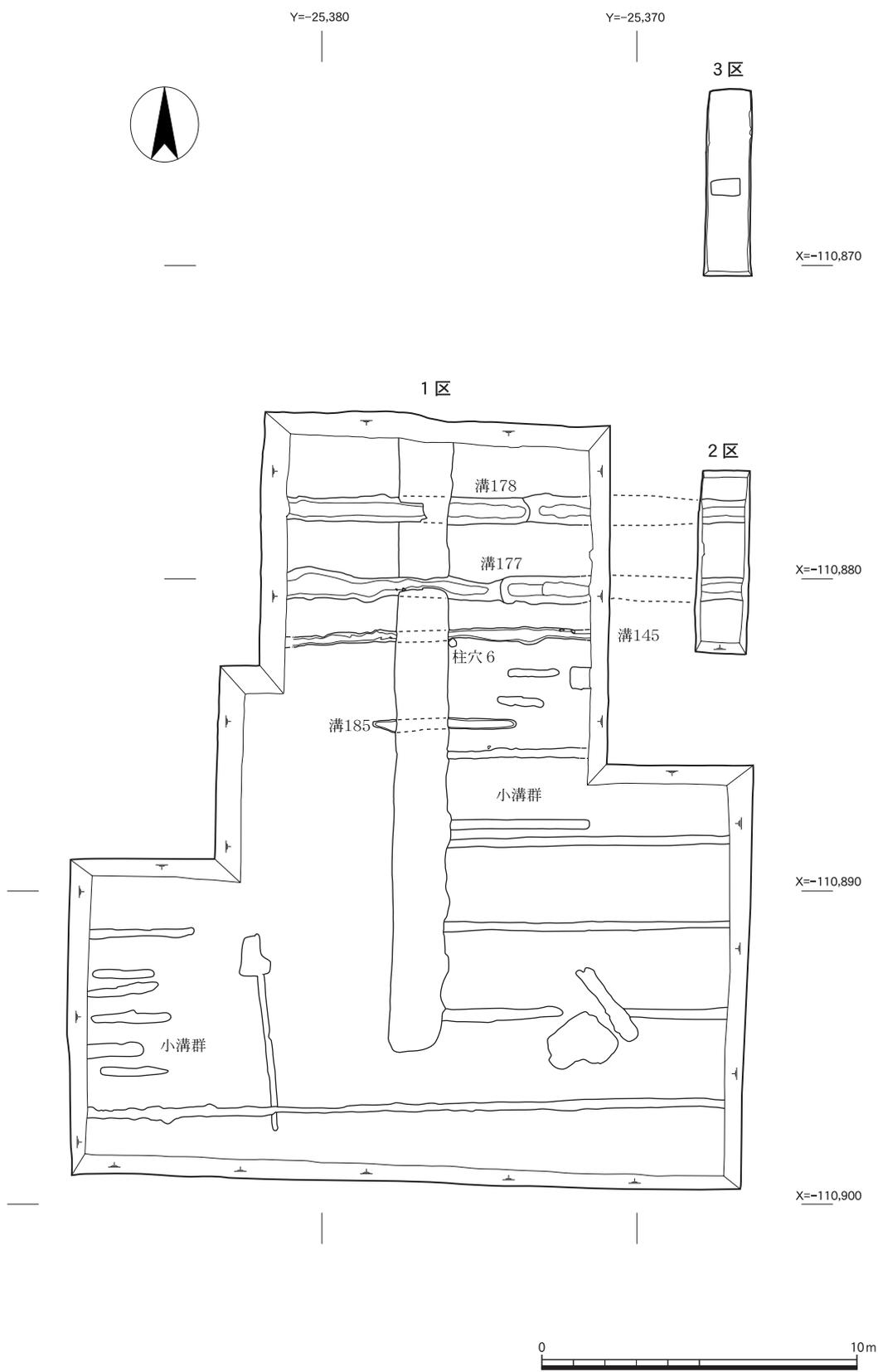


图6 第1期遺構平面図 (1:200)

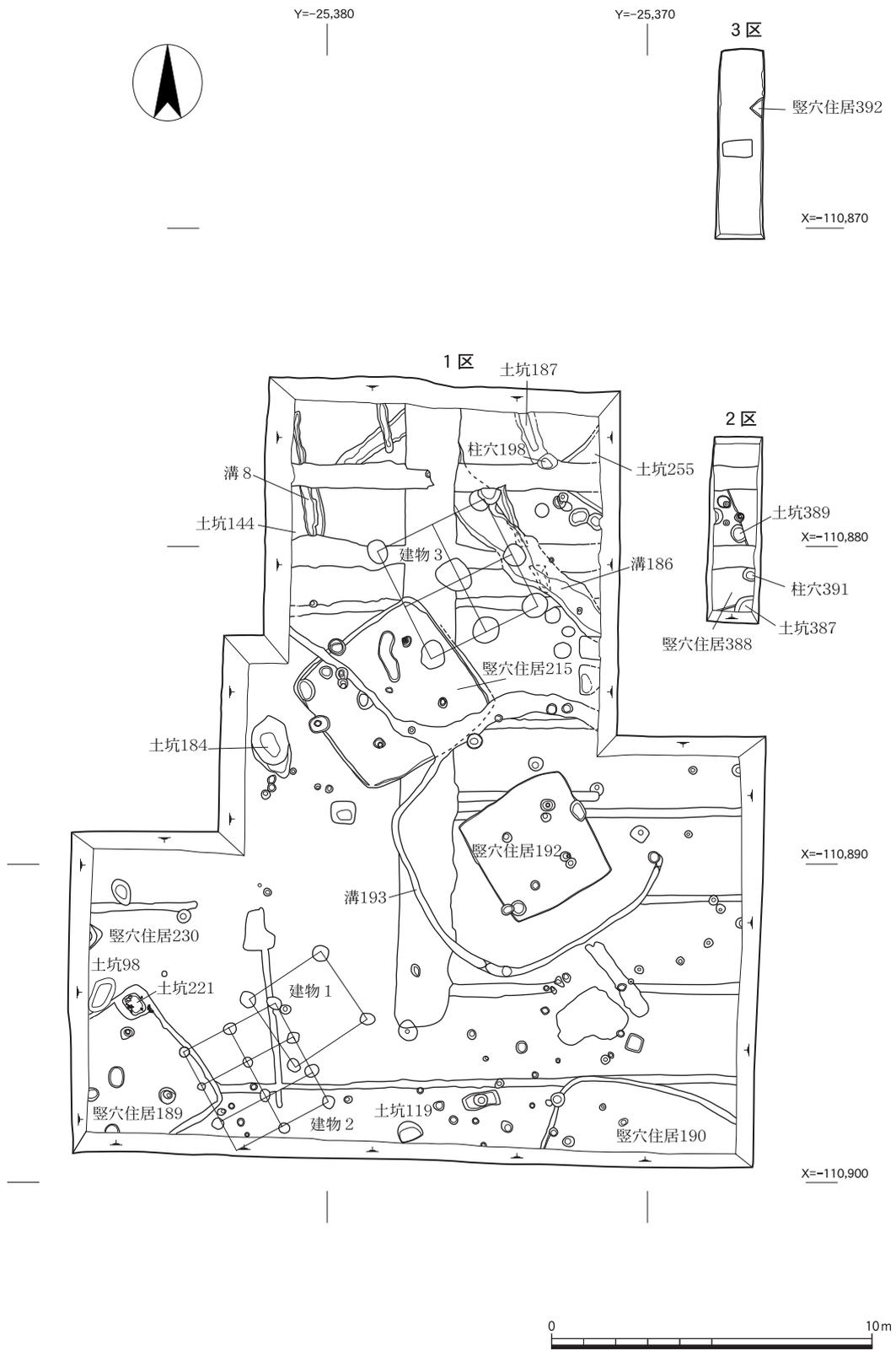


图7 第2期遺構平面図(1:200)

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
中世	小溝群	耕作溝
奈良時代～平安時代	溝177・178・185、柱穴6	
古墳時代中期～後期	建物1～3、竪穴住居189・190・192・215・230・388・392、溝8・186、土坑98・119・144・184・187・221・387・389、柱穴198・391	
弥生時代後期 ～古墳時代前期	竪穴住居115・188・216・228・242・243・246・250・300・303・384、溝245、柱穴320・322	

遺構の年代から、奈良時代から中世を第1期、古墳時代中期から後期を第2期、弥生時代後期から古墳時代前期を第3期として調査を行った。

## (2) 第1期 奈良時代から中世の遺構 (図6)

多数の小溝群と溝数条、柱穴などを確認した。

**小溝群** 調査区南半を中心に東西方向の溝を多数確認した。溝は、幅0.5m、深さ0.1mのもの、幅0.3m、深さ0.05mの規模のものに分かれるが、いずれも耕作に関わる溝と考えられる。埋土から、土師器皿、須恵器杯・杯蓋・甕・壺、瓦器鍋・羽釜、平瓦、輸入陶磁器碗が出土しており、平安時代から中世のものとする。

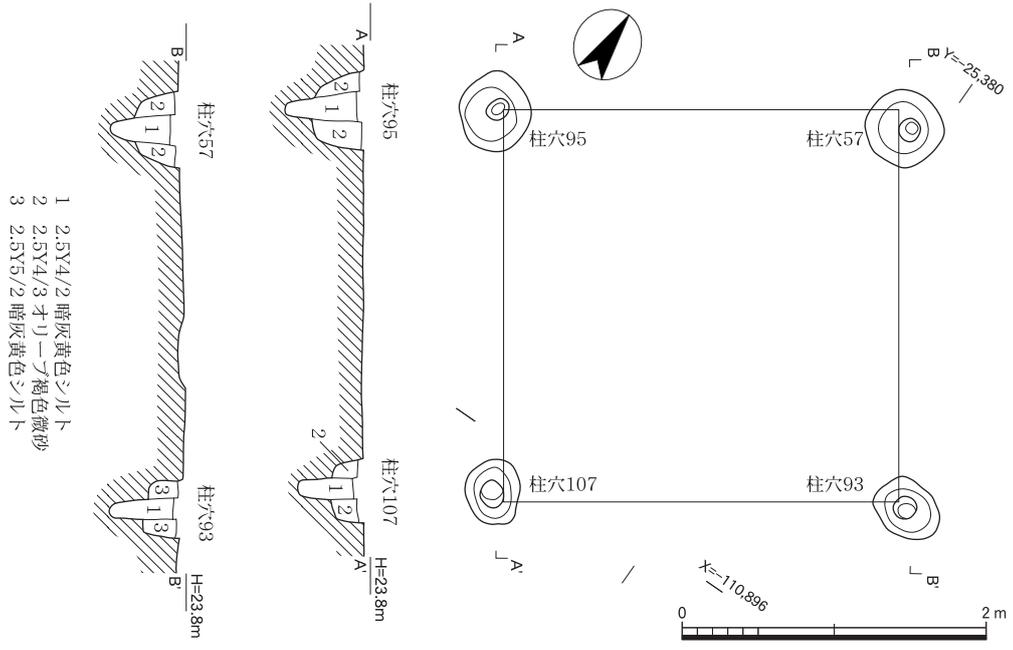
**溝177・178** 東西方向に並行して直線的に延びる溝である。1区と2区で確認している。幅は0.7～1.0m、深さ0.4m、長さは14m以上ある。溝の心々間の距離は、約2.6mである。埋土から、弥生土器甕、須恵器杯、土師器甕、平瓦、石器が少量出土している。明確な年代を示す遺物はなかったが、遺構の重複関係と形状、方位、四行八門制による区割りにのらないことから、奈良時代と考える。

## (3) 第2期 古墳時代中期から後期の遺構 (図7)

竪穴住居を計7棟と掘立柱建物、溝、土坑などを確認している。

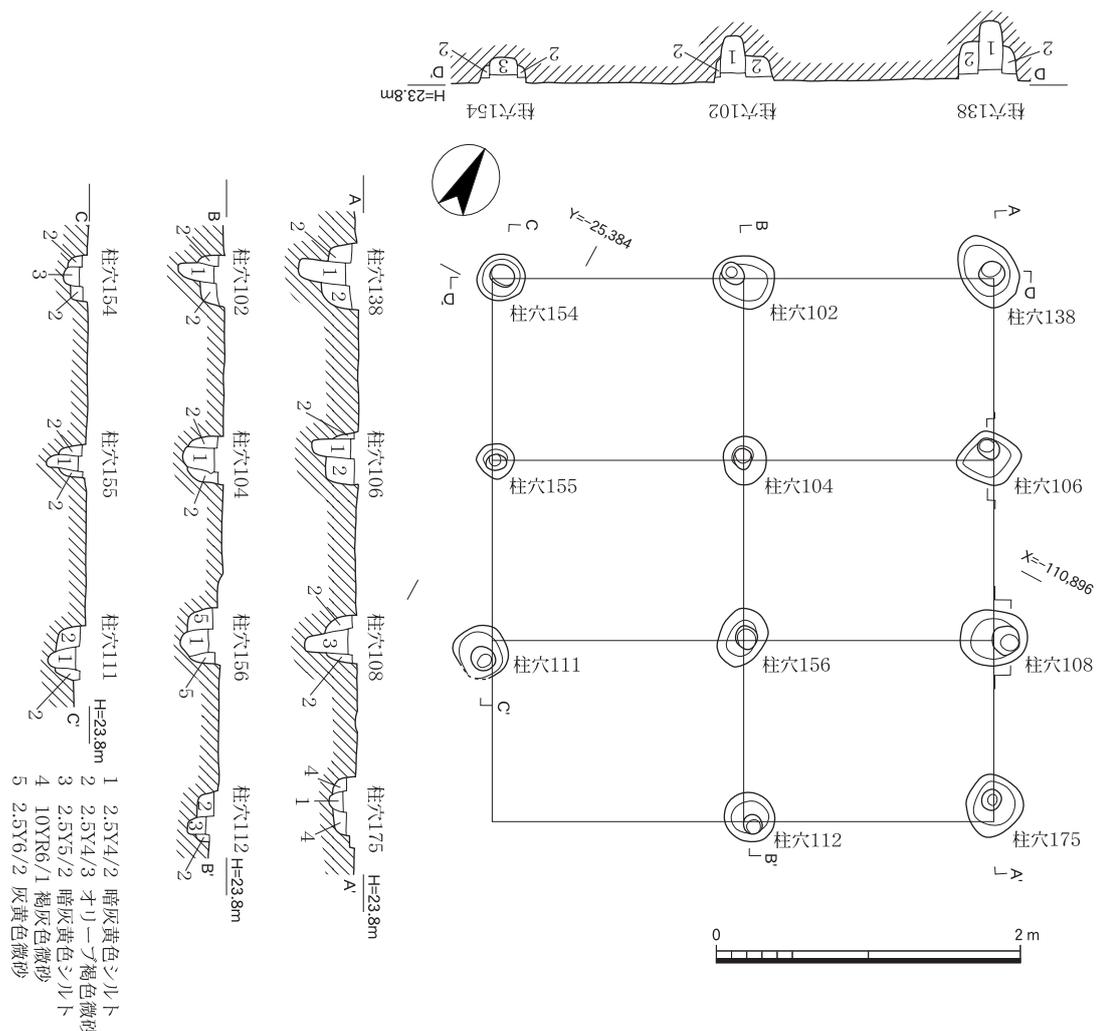
**建物1 (図8)** 1区南西部で検出した1間×1間の建物である。方位はN35°Wである。柱穴掘形の平面形は、不整形で、直径0.4～0.5m、深さ0.4～0.5m、柱間2.5mである。地山の傾斜から、調査区南半は削平を受けていると思われ、建物1の柱穴は、竪穴住居の支柱穴である可能性が高い。埋土から、須恵器、土師器が少量出土している。

**建物2 (図9)** 1区南西部で検出した2間×3間の総柱の掘立柱建物である。南西隅柱は調査区外である。方位はN30°Wである。柱穴掘形の平面形は、不整形である。直径は0.2～0.5m、深さ0.15～0.35m、柱間1.2mと小規模である。総柱であることから、倉庫と考えられる。埋土から、須恵器杯身、土師器が少量出土している。



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色微砂
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト

図8 建物1実測図 (1:50)



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色微砂
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
- 4 10YR6/1 褐色微砂
- 5 2.5Y6/2 灰黄色微砂

図9 建物2実測図 (1:50)

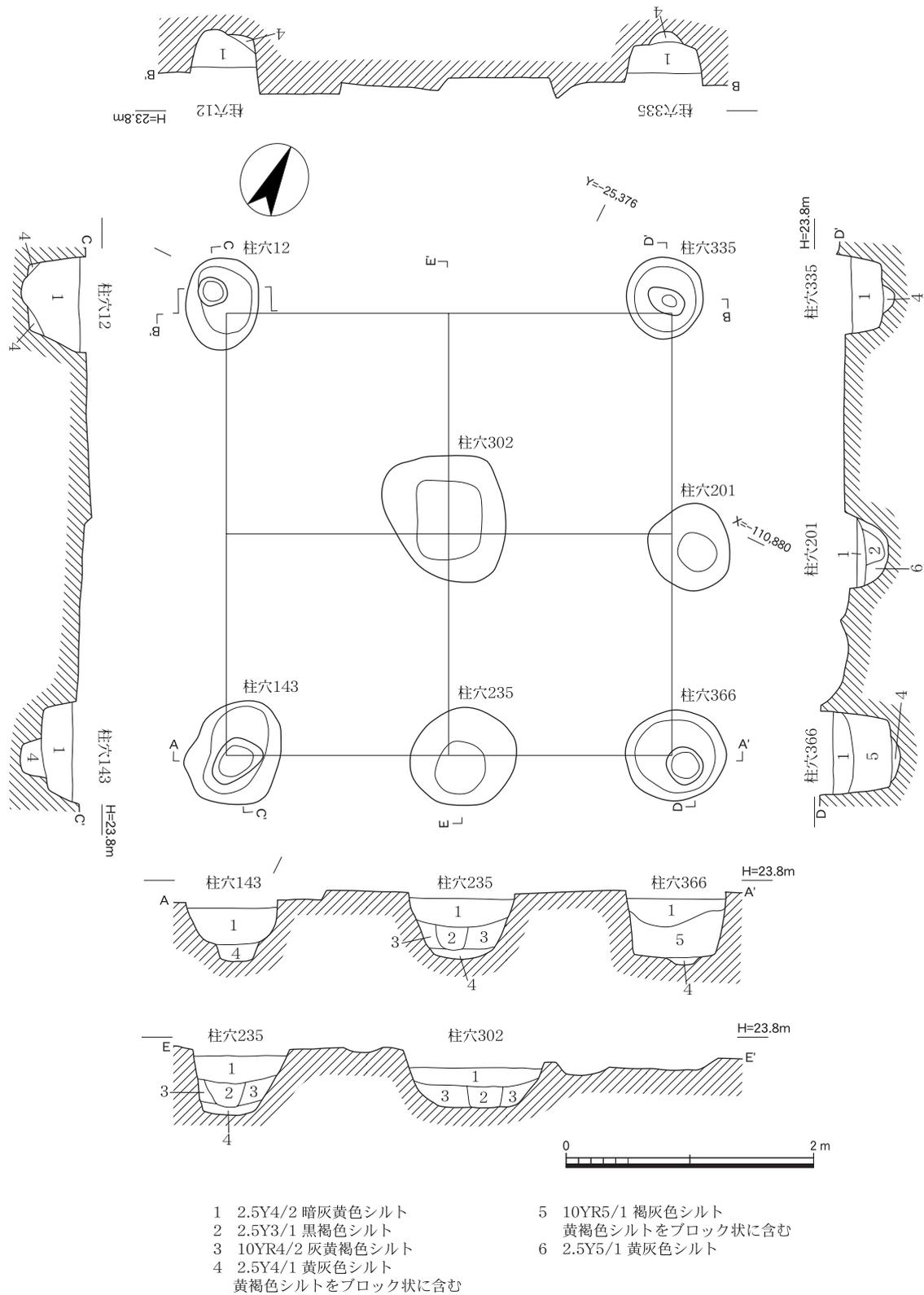


図10 建物3実測図 (1:50)

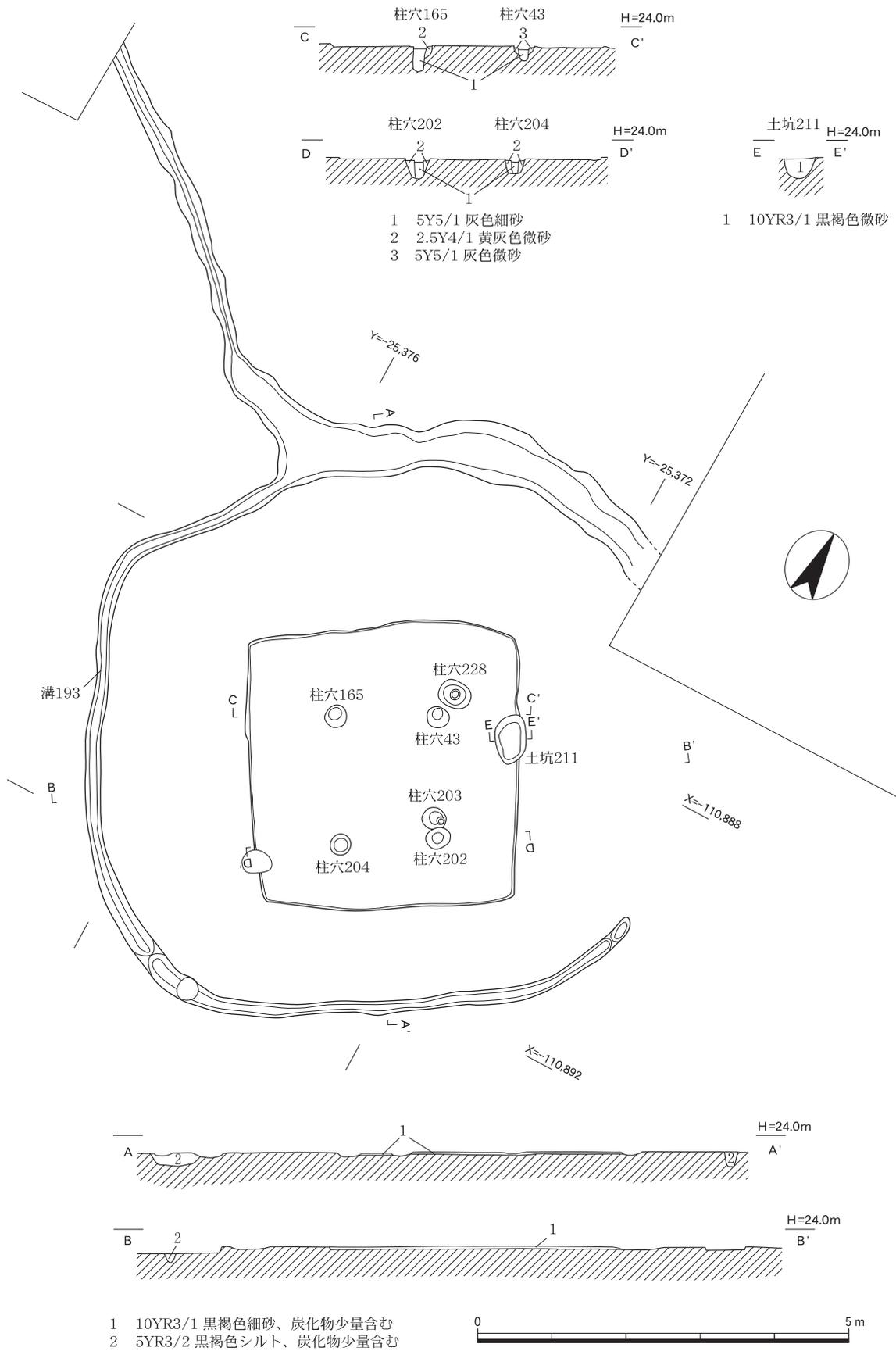


図 11 竪穴住居 192 実測図 (1 : 80)

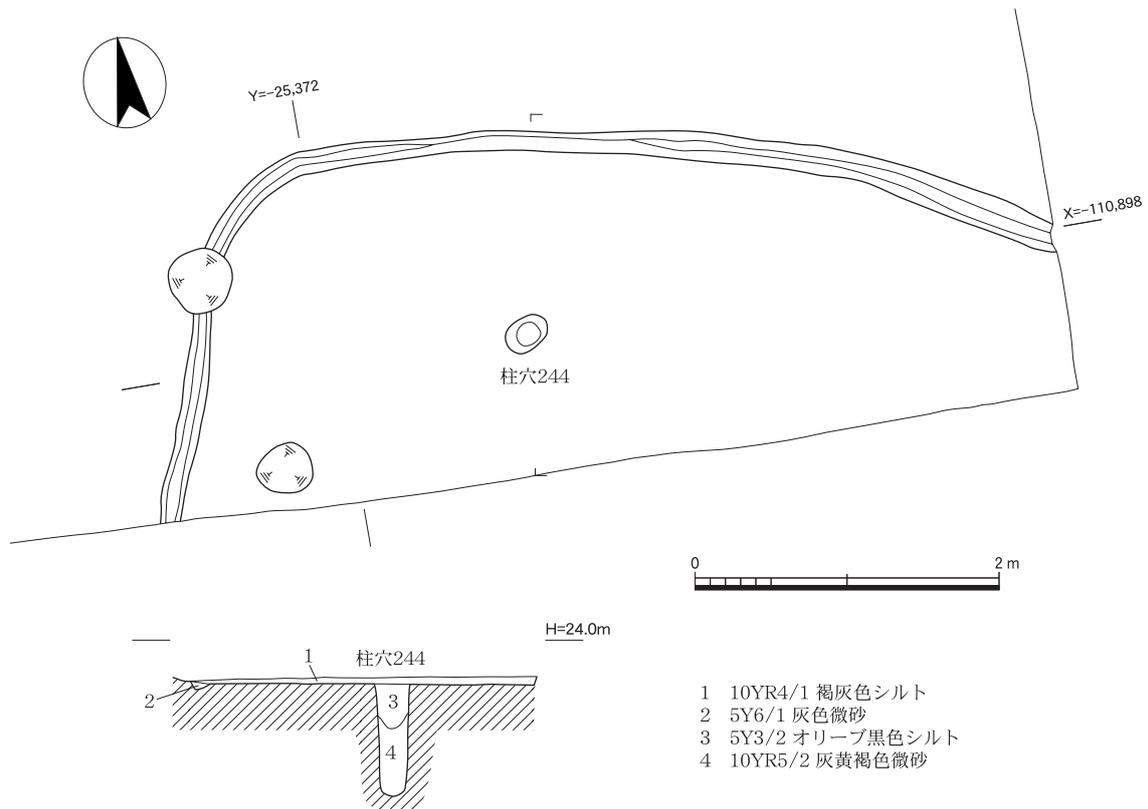


図12 竪穴住居190実測図(1:50)

建物3(図10) 1区北部で検出した2間×2間の総柱の掘立柱建物である。方位はN30°Wである。柱穴掘形の平面形は、不整形で、直径0.7～1.0m、深さ0.3～0.6m、柱間1.8m。埋土から、須恵器杯身、土師器、弥生土器が少量出土している。重複関係から、溝186に先行する。

竪穴住居192(図11、図版3-3) 1区中央部で検出した。方位はN30°Wである。竪穴の平面形は方形で、一辺3.8m×3.9m、深さ0.04m。主柱穴は4基であるが、内2基に隣接して同規模の柱穴が確認できたことから、造り替えが行われたことを示している。柱穴の掘形は円形で、直径0.2～0.4m、深さ0.2～0.3m。東辺中央には、土坑211を確認している。平面形は楕円形で、長軸0.6m、短軸0.4m、深さ0.2m。断面形はU字状である。貯蔵穴であると考え。竈、壁溝の痕跡は見られなかった。

竪穴の周囲を巡る溝193は、周堤外側の排水溝であると考えられる。溝193は、東側で途切れて全周しないが、北西部に向かって下降する溝が接続している。周溝規模は、外側で直径8.0～8.8m。溝幅は、南側で0.2～0.3m、深さ0.2m、北側で、幅0.6～0.8m、深さ0.2m。周堤の盛土は確認できなかったが、幅1.2～2.0mである。

竪穴の埋土は削平され、遺物は少ないが、溝193から出土した須恵器杯身は、5世紀後葉に属するものである。

竪穴住居190(図12) 1区南東部で検出したが、大半は調査区外に広がる。方位はN15°Wである。平面形は隅丸方形で、一辺6m以上、深さは0.1m。検出した部分では、壁溝を確認している。壁溝の規模は、幅0.1～0.2m、深さ0.05m。主柱穴は1基確認している。柱穴の掘形は、

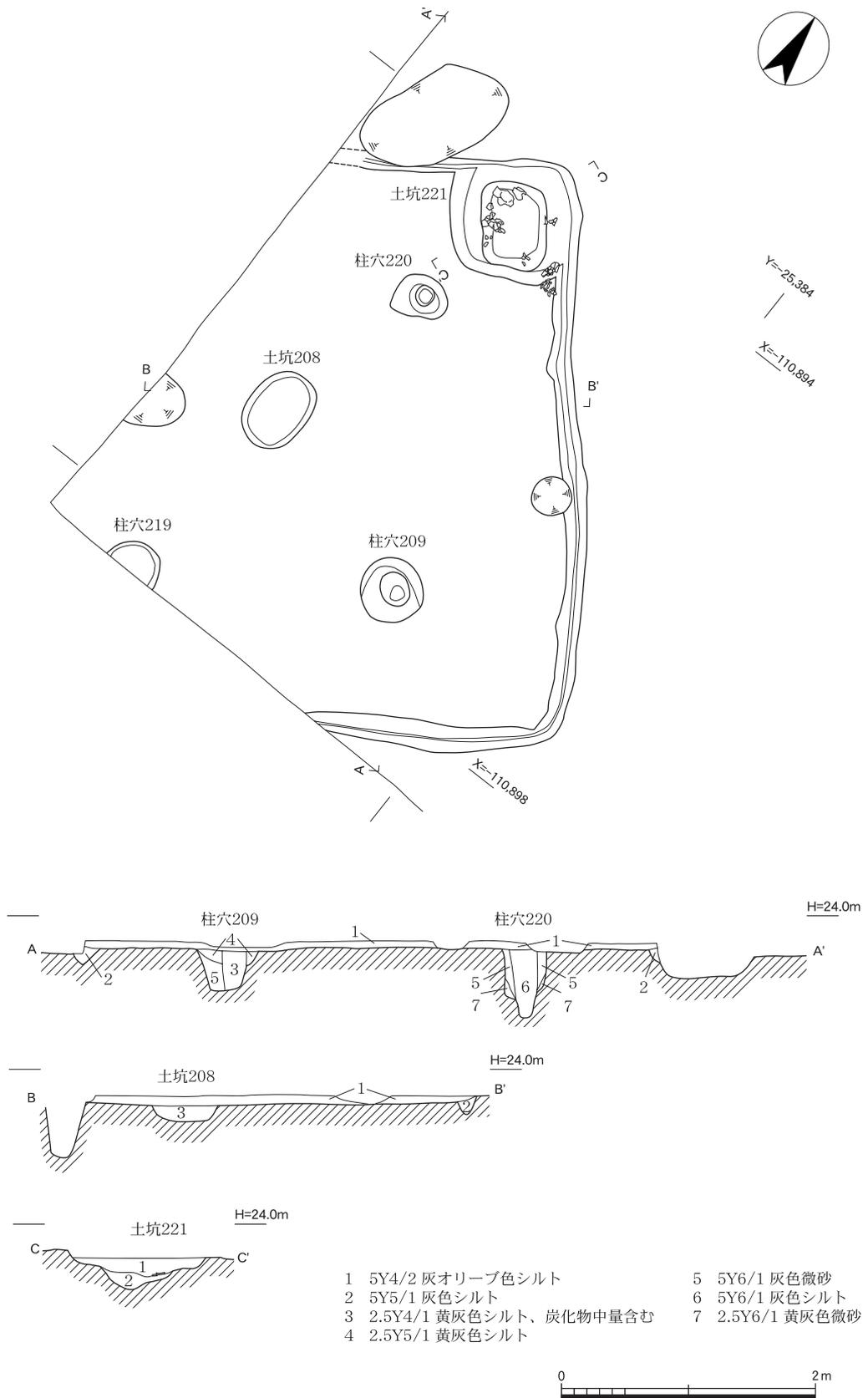


図 13 竪穴住居 189 実測図 (1 : 50)

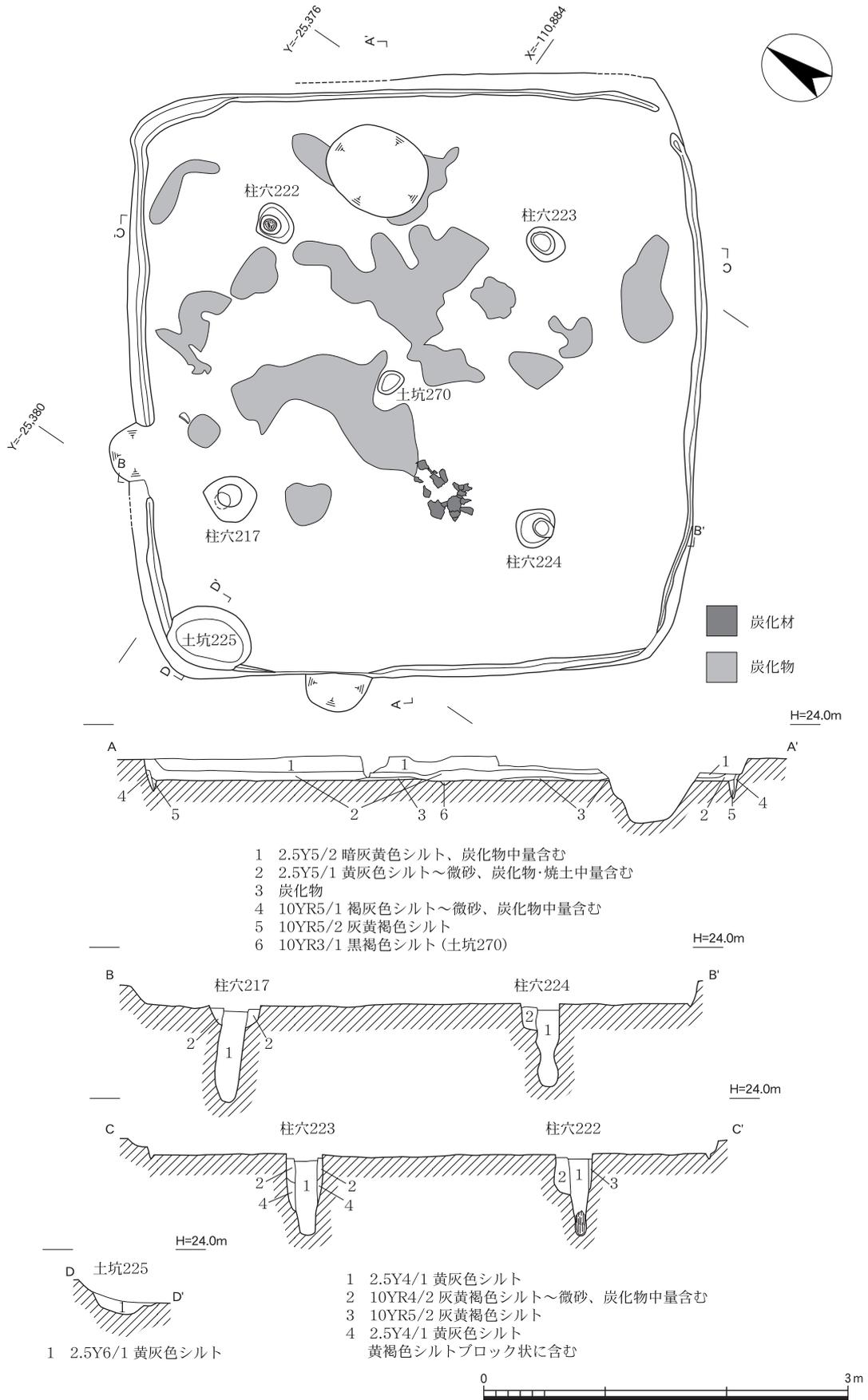


図 14 竪穴住居 215 実測図 (1 : 50)

楕円形で、直径 0.2 m × 0.3 m、深さ 0.7 m。

埋土から、須恵器甕、土師器が出土している。

竪穴住居 230 1区西部中央で検出したが、大半が調査区外にひろがる。平面形は隅丸方形と思われる。深さ 0.3 m。検出した部分には、壁溝を確認している。壁溝の規模は、幅 0.2 m、深さ 0.1 m。

埋土から、須恵器甕が出土している。

竪穴住居 189 (図 13) 1区南西部で検出したが、西半分は調査区外に広がる。方位は N35° W である。平面形は隅丸方形で、一辺 4.5 m、深さ 0.1 m。検出した部分には、壁溝を確認した。壁溝の規模は、幅 0.1 ~ 0.2 m、深さ 0.1 m。主柱穴は、3 基確認している。柱穴の掘形は、円形で直径 0.3 ~ 0.5 m、深さ 0.3 ~ 0.5 m。

床面中央には、土坑 208 を確認している。平面形は楕円形で、長軸 0.7 m、短軸 0.5 m、深さ 0.1 m。埋土には、炭化物が多く含まれており、炉と考える。北東隅には、土坑 221 を確認している。平面形は、隅丸方形で、1 m × 1 m、深さ 0.25 m。断面形は、播り鉢状である。土坑 221 からは、布留式の甕の特徴を残す土師器甕が出土している。竪穴の床面、埋土には炭化物が多く認められたことから、焼失住居であることがわかる。

埋土から、須恵器器台・土師器甕が出土している。

竪穴住居 215 (図 14) 1区中央部で検出した。方位は N35° W である。平面形は隅丸方形で、一辺 4.5 m × 5 m、深さ 0.2 m である。壁溝は、幅 0.05 ~ 0.2 m、深さ 0.15 m。ほぼ全周するが、北隅と東隅で途切れている。壁際には、焼けた板壁状の痕跡が認められた(4層)。主柱穴は 4 基を確認し、柱穴 222 には、柱根が残存していた。柱穴の掘形は円形で、直径 0.3 ~ 0.5 m、深さ 0.7 ~ 0.8 m。

床面中央には、土坑 270 を確認した。平面形は不整円形で、0.2 m × 0.15 m、深さ 0.05 m。

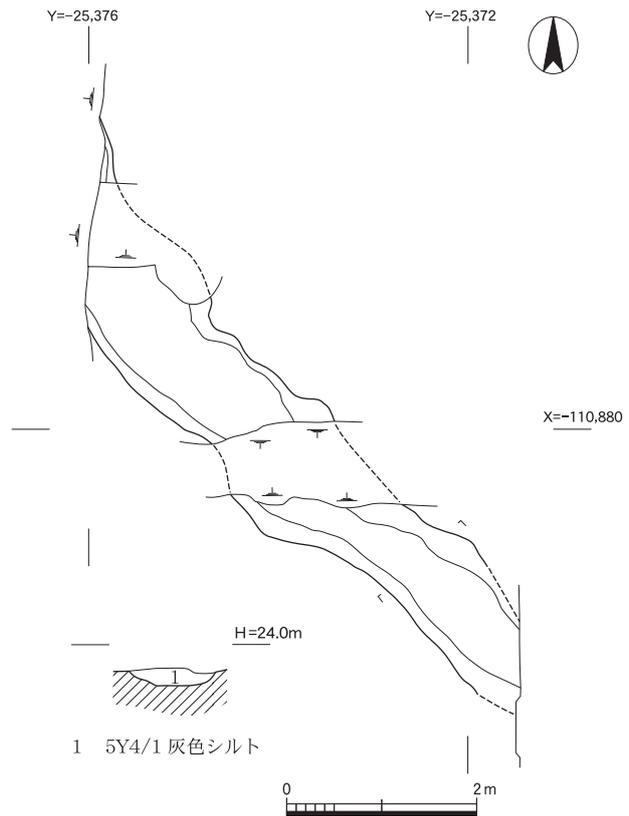


図 15 溝 186 実測図 (1 : 80)

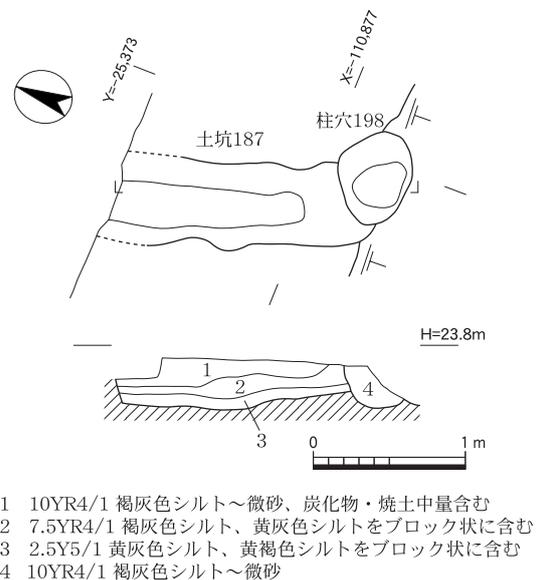


図 16 土坑 187・柱穴 198 実測図 (1 : 50)

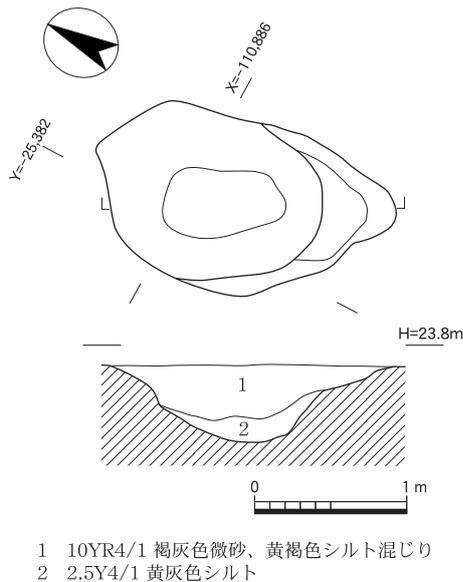


図 17 土坑 184 実測図 (1 : 50)

大半は調査区外である。深さ 0.1 m。壁溝、支柱穴などは確認できなかった。

埋土から、遺物は認められなかった。

溝 186(図 15) 1 区北部で検出した。規模は、幅 0.8 ~ 1.1 m、深さ 0.2 m、長さ 6.5 m 以上である。断面形は U 字形状である。出土した遺物は、5 世紀後葉に属する須恵器がまとまって出土している。埋土は単層であり、出土した遺物に時間幅がないことから、一度に埋め戻されたことがわかる。

土坑 187・柱穴 198(図 16) 1 区北東部で検出した。土坑 187 は、幅 0.6 m、深さ 0.3 m、長さ 1.7 m 以上ある。埋土から、5 世紀後葉 ~ 6 世紀前葉に属する須恵器が多く出土している。柱穴 198 は、掘形は円形で、直径 0.6m、深さ 0.25 m。埋土から、土師器の甕が出土している。

土坑 184(図 17) 1 区中央西寄り検出した。平面形は不整形な楕円形で、長軸 2.0 m、短軸 1.2 m、深さ 0.5 m。断面形は掘り鉢状をしている。埋土から、土師器、須恵器の細片が出土している。

土坑 98 1 区南西部で検出した。竪穴住居 189 を削平している。平面形は楕円形で、長軸 1.1 m 以上、短軸 0.8 m、深さ 0.25 m である。埋土から、土師器細片が出土している。

#### (4) 第 3 期 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構 (図 18)

竪穴住居 228 1 区北西部で検出した。西側は調査区外に広がるが、平面形は隅丸方形と思われる。方位は N45° W である。一辺 3 m 以上 × 2.5 m 以上、深さ 0.15 m。支柱穴は 1 基確認した。柱穴の掘形は、円形で直径 0.3 m、深さ 0.25 m。検出した部分には、壁溝が認められたが、一部途切れている。壁溝の規模は幅 0.15 m、深さ 0.1 m。

埋土から庄内式併行期の遺物が出土している。

竪穴住居 303 1 区北西部で検出した。西側は調査区外に広がるが、平面形は隅丸方形と思われる。方位は N45° W である。一辺 1.5 m 以上、深さ 0.2 m。検出した部分には、壁溝が認められた。規模は、幅 0.15 m、深さ 0.1 m。支柱穴は確認できなかった。

埋土には、灰が多量に含まれていることから、炉と考える。南西隅には、土坑 225 を確認した。平面形は楕円形で、0.7 m × 0.5 m、深さ 0.1 m。貯蔵穴と考える。竪穴の床面には、炭化物が広がることから、焼失住居であることがわかる。炭化物の樹種は広葉樹である。

埋土から、土師器高杯が出土している。

竪穴住居 388 2 区で検出した。東辺、南辺を確認したが、大半は調査区外に広がる。方位は N20° W である。深さ 0.15 m。壁溝は認められなかった。東辺に、土坑 389 を確認している。平面形は楕円形で、0.6 m × 0.4 m、深さ 0.4 m。断面形は逆台形状である。貯蔵穴と考える。

埋土から、須恵器杯蓋、土師器細片が出土している。

竪穴住居 392 3 区で検出した。西隅を確認したが、

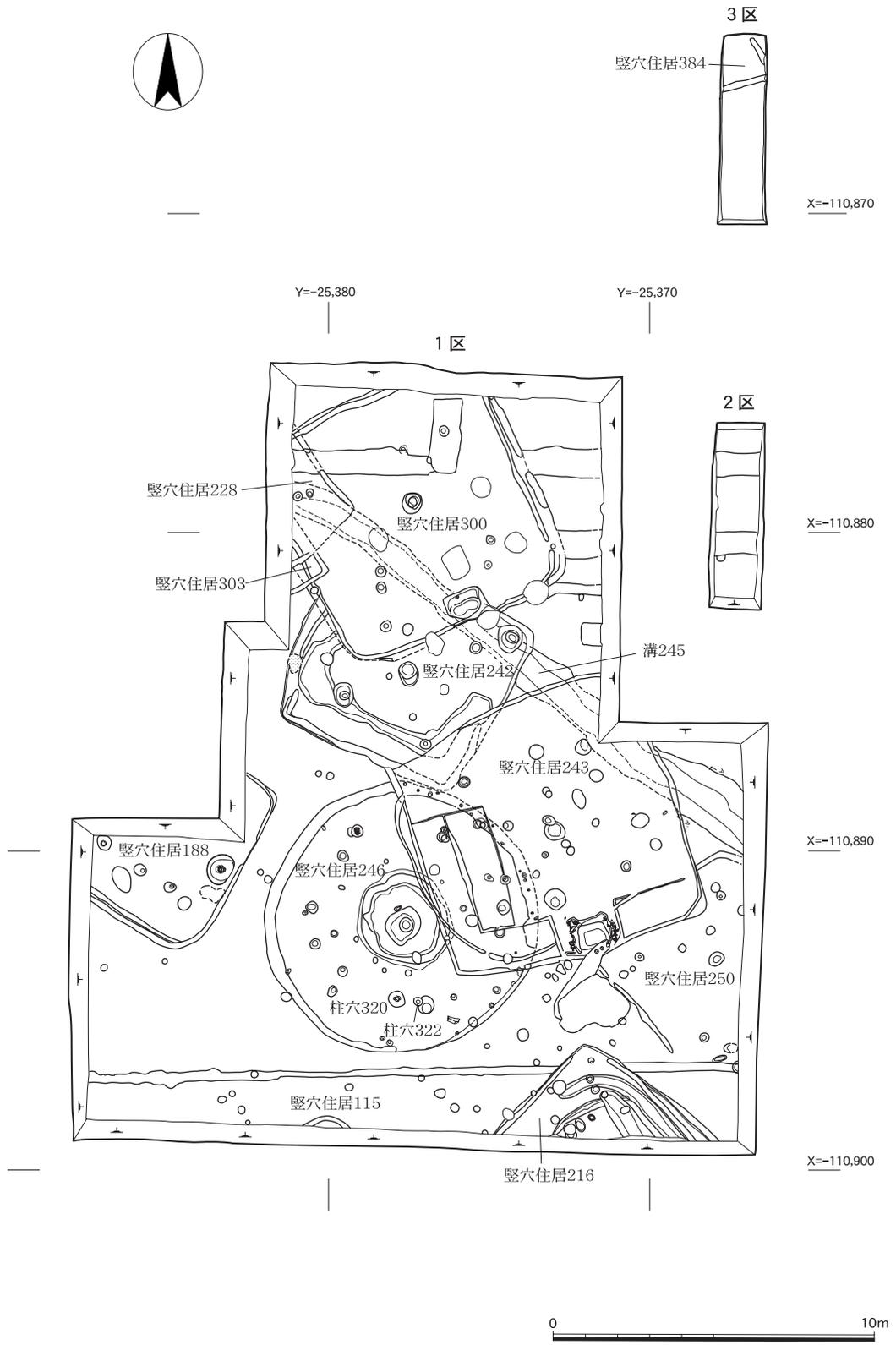


图 18 第 3 期遺構平面図 (1 : 200)

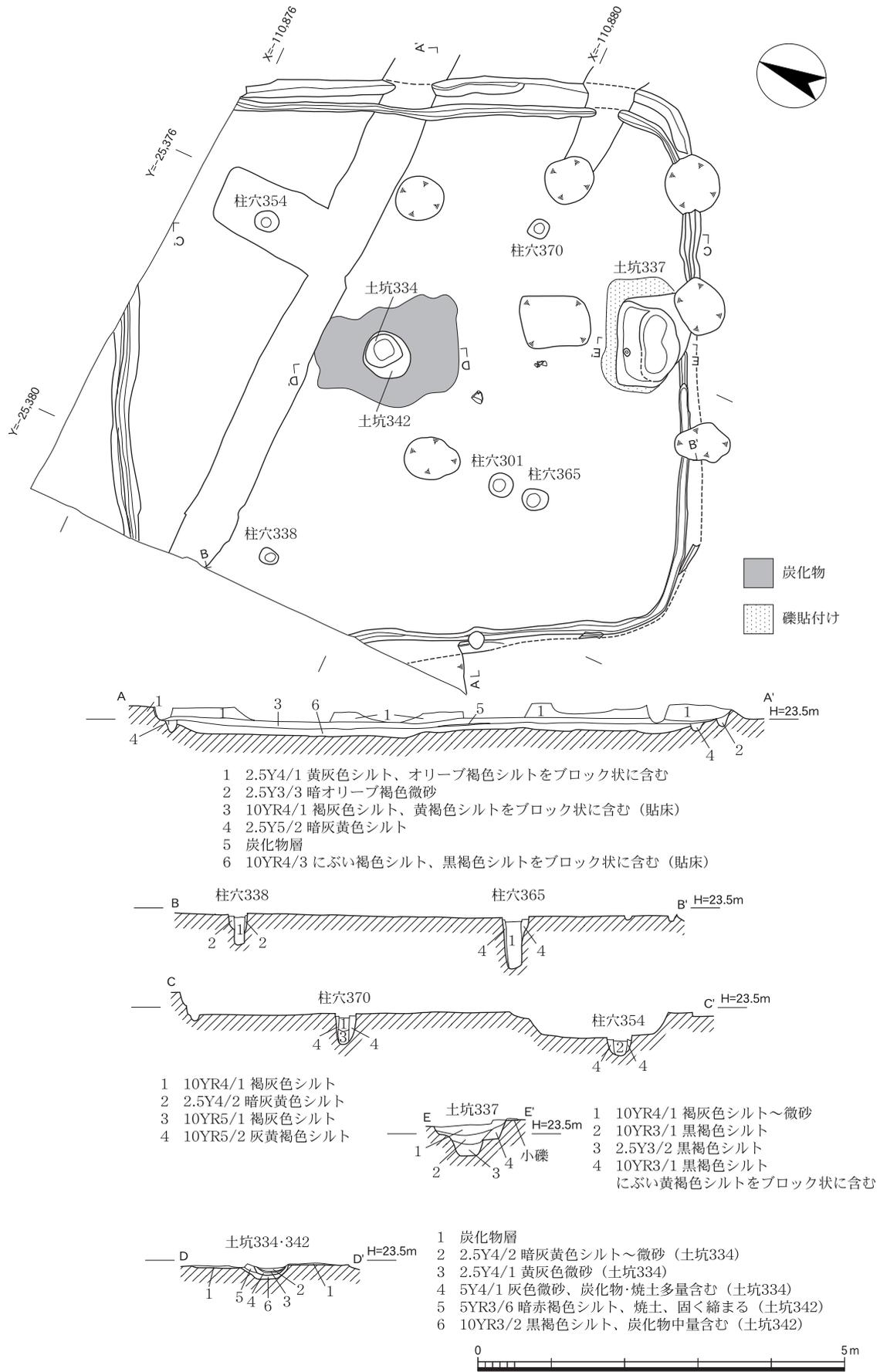


図 19 竪穴住居 300 実測図 (1 : 80)

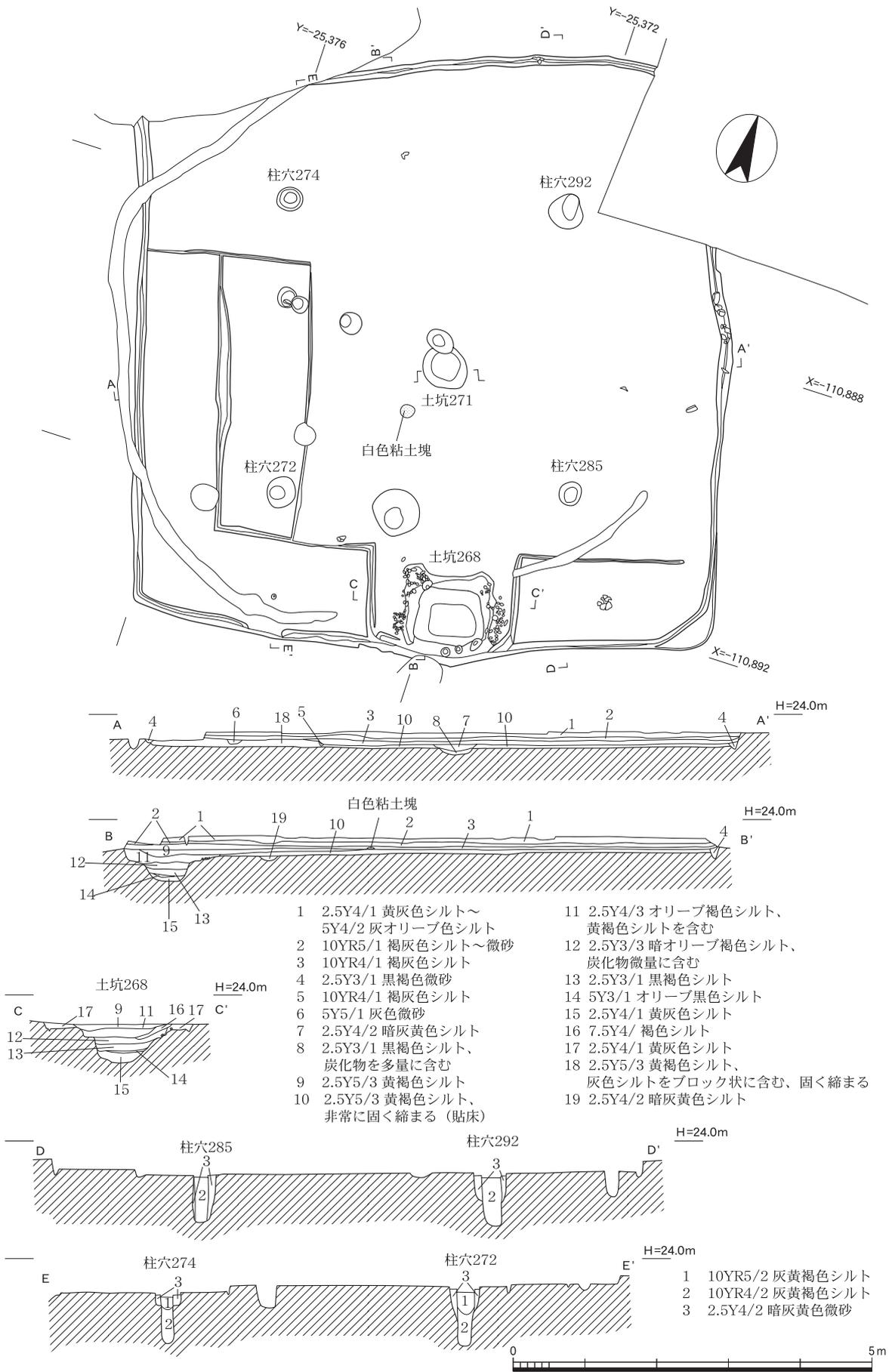


図 20 竪穴住居 243 実測図 (1 : 80)

埋土から遺物は出土していない。

竪穴住居 300 (図 19) 1 区北部で検出した。平面形は隅丸方形である。方位は N25° W である。1 度の拡張が認められる。当初、一辺が 7.6 m × 7.4 m の規模で、四辺を 0.1 ~ 0.6 m 広げ、最終的に一辺 8 m × 8 m、深さ 0.3 m となる。床面には当初厚さ 6 ~ 12 cm の貼床 (6 層) が、拡張後も厚さ 4 cm の貼床 (3 層) が認められる。特に南西側に厚いのは、下層に溝 245 が存在したためと考えられる。壁溝は、幅 0.08 ~ 0.2 m で、深さ 0.1 ~ 0.2 m。支柱穴は 4 基で、南西の 1 基を除き、拡張後も共有している。柱穴の掘形は、不整形な円形で、直径 0.2 ~ 0.3 m、深さ 0.4 ~ 0.7 m。

南辺中央には、土坑 337 を検出した。掘形は、隅丸方形を呈しており、1.2 m × 0.8 m、深さ 0.5 m。断面形は、逆台形状を呈しており、肩口には小礫を貼り付けている。位置、形状から貯蔵穴と考えられ、拡張後もそのまま共有している。

床面中央には、拡張前では土坑 342、拡張後には土坑 334 を確認している。拡張する際に、土坑 342 を埋め、ほぼ同じ場所に土坑 334 が成立する。土坑 342 は、掘形は楕円形で、直径 0.6 m、深さ 0.2 m。土坑 334 は、掘形は不整形な円形で、0.4 m × 0.5 m、深さ 0.12 m。2 基とも底には炭化物の層 (4・6 層) が認められることから、炉と考えられる。

埋土からは、庄内式併行期の甕、高杯などが出土している。

竪穴住居 243 (図 20) 1 区中央部で検出した。方位は N25° W である。平面形は隅丸方形で、一辺 8.4 m × 8.2 m、深さは 0.3 m。壁溝は全周し、幅 0.08 ~ 0.16 m、深さ 0.04 m。床面には、厚さ 3 cm の貼床 (10 層) を確認している。支柱穴は 4 基。柱穴の掘形は不整形な円形で、直径 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.6 m。また、南辺中央には、土坑 268 を確認した。平面形は不整形な方形で、1.2 m × 1.1 m、深さ 0.7 m。断面形は、逆台形状を呈する。一段下がった肩口には礫を貼り付けており、貯蔵穴と考えられる。床面中央には土坑 271 を確認している。掘形は円形で直径 0.6 m、深さ 0.16 m。底部には、炭化物が堆積し、壁面は熱を受け、赤く変色していることから、炉と考える。

また、南辺と東辺の壁際には、盛土を行い、いわゆるベット状遺構を構築している。盛土の厚さ約 8 cm。ベット状遺構の周囲には、幅 0.04 ~ 0.08 m、深さ 0.05 m の細い溝が巡ることから、盛土側面に板を貼り付けていた可能性がある。

埋土からは、庄内式併行期の甕、高杯などが出土している。床面では、白色粘土塊を確認している。遺構の形状、規模、方位、貯蔵穴の構造など、竪穴住居 300 との共通点は多い。

竪穴住居 216 (図 21・22) 1 区南東部で検出した。南半は調査区外に広がる。方位は N45° W。平面形は隅丸方形と思われる。2 度の拡張が認められ、最終的に一辺が 4 m × 4 m 以上となる。深さは最大で 0.3 m。支柱穴は 1 基確認している。壁溝は一部で途切れている。貯蔵穴、炉は確認できなかった。壁溝際には、幅 0.5 ~ 0.7 m、深さ 0.35 m の溝が巡る。

住居の埋土からは、土師器が少量出土している。

竪穴住居 242 (図 23) 1 区北部で検出した。方位は N35° W である。平面形は隅丸方形で、一辺 6 m × 6.6 m、深さ 0.3 m。壁溝は、幅 0.15 ~ 0.3 m、深さ 0.1 m で一部途切れている。床

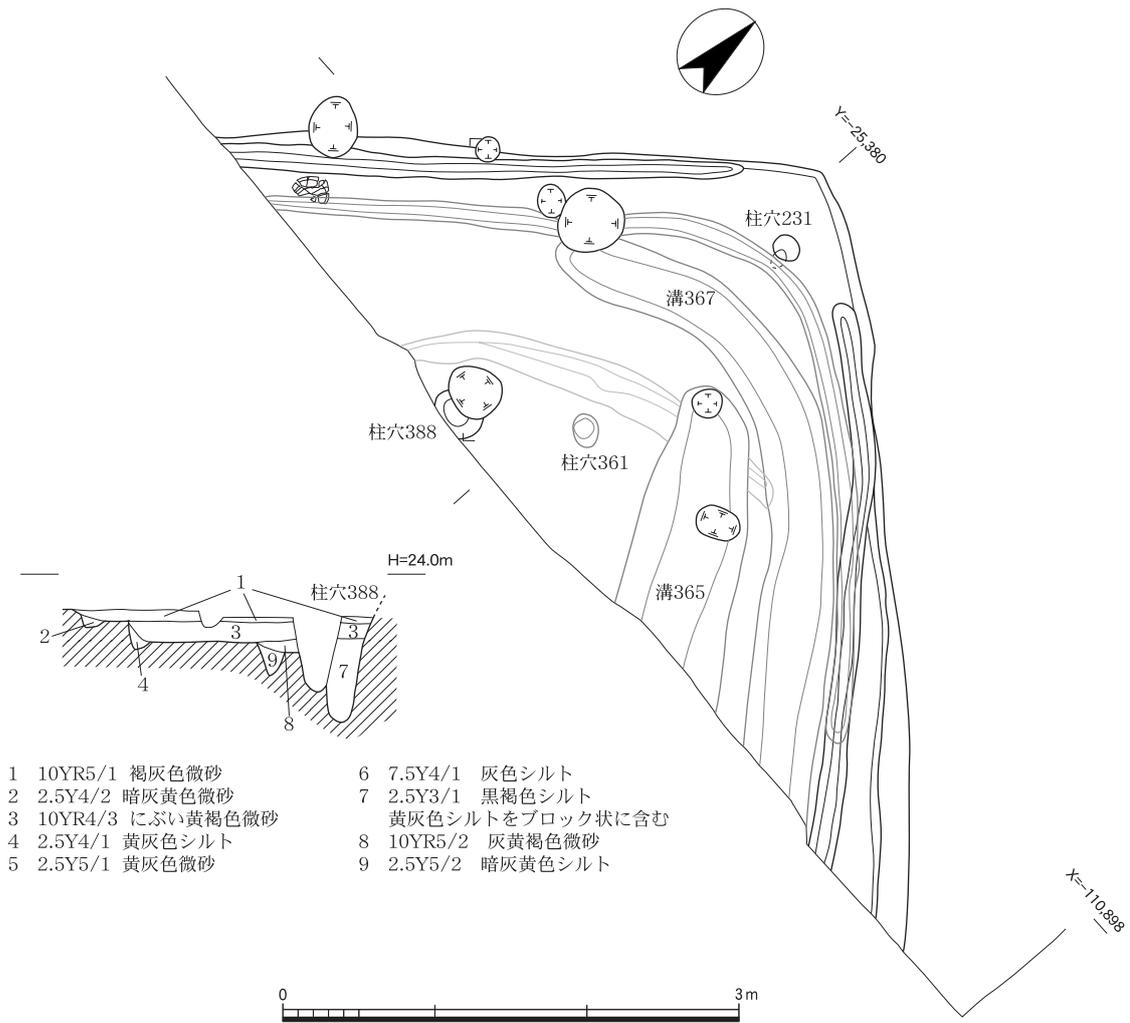


図 21 竪穴住居 216 実測図 (1 : 50)

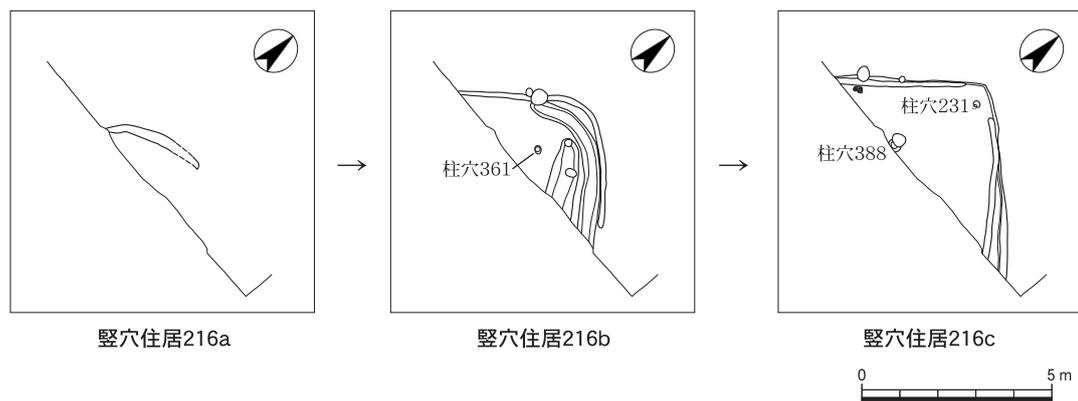


図 22 竪穴住居 216 変遷図 (1 : 200)

面の南半には幅 0.4 ~ 0.8 m、深さ 0.1 m の溝が壁溝に沿って巡る。この溝の内側には、貼床 (11 層) が 4 cm の厚さで認められる。主柱穴は 4 基。柱穴の掘形は、不整形な円形で、直径 0.3 ~ 0.7 m、深さ 0.4 ~ 0.7 m。北東隅には土坑 368 を確認している。平面形は不整形な円形で、直径 0.8 m、深さ 0.45 m。断面形は、逆台形状を呈し、貯蔵穴と考える。中央部には土坑 345 を確認している。平面形は不整形な円形で、直径 0.6 m × 0.8 m、深さ 0.2 m。炉と考える。

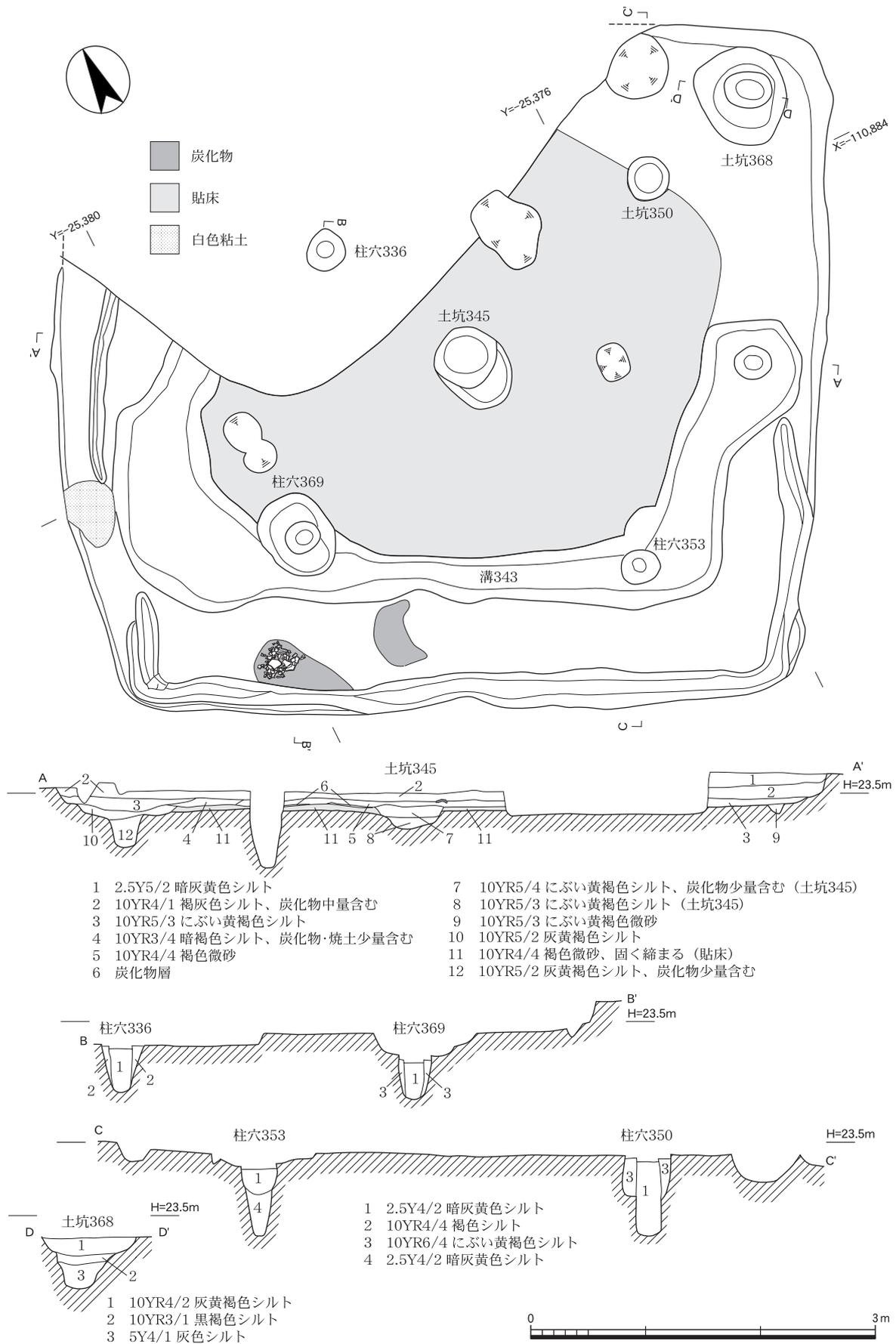
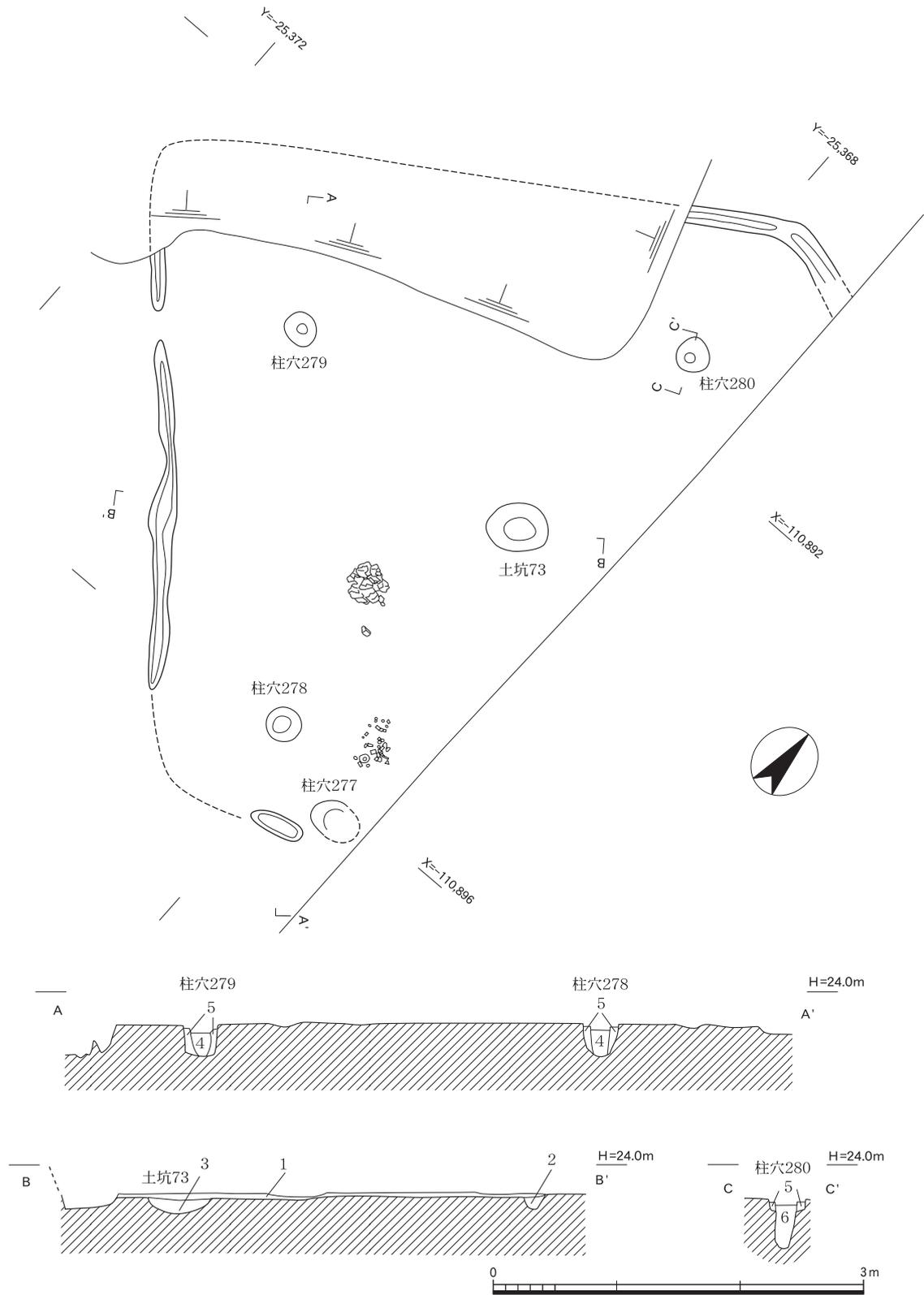


図 23 竪穴住居 242 実測図 (1 : 50)



- 1 10YR4/1 褐灰色シルト
- 2 5Y5/1 灰色シルト
- 3 2.5Y4/1 黄灰色シルト～微砂、炭化物を少量含む

- 4 10YR5/2 灰黄褐色シルト
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色微砂
- 6 2.5Y5/3 黄褐色シルト、灰色シルトをブロック状に含む

図 24 竪穴住居 250 実測図 (1 : 50)

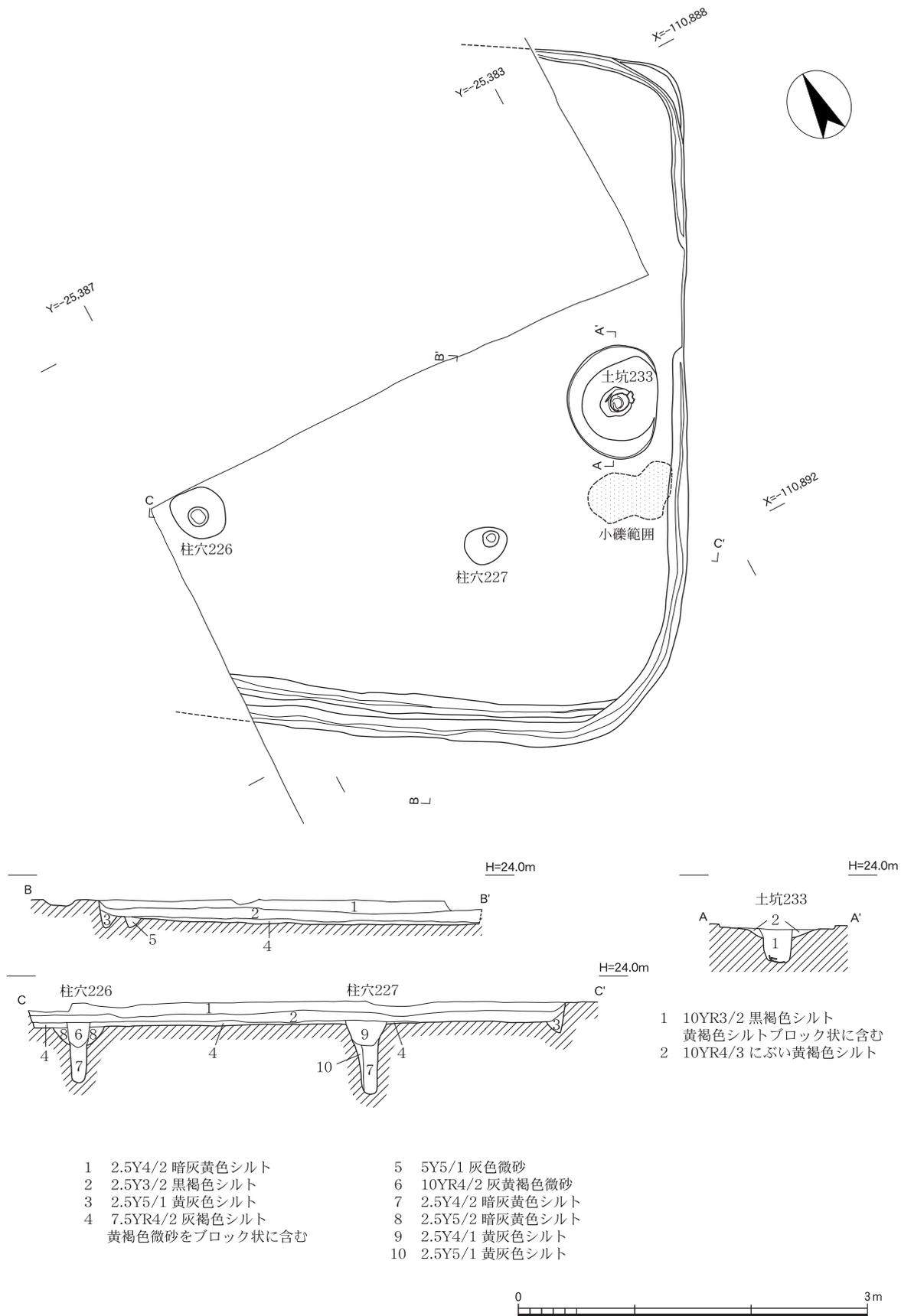
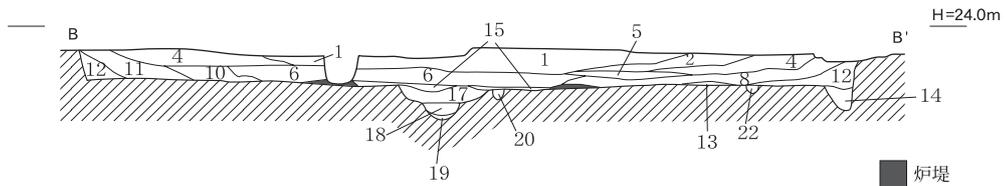
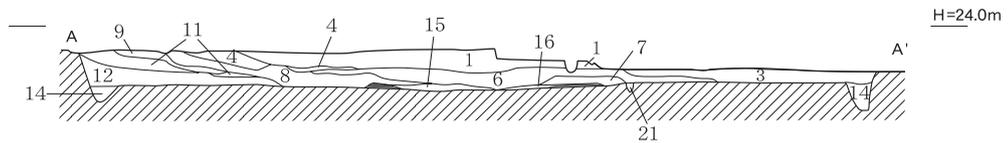
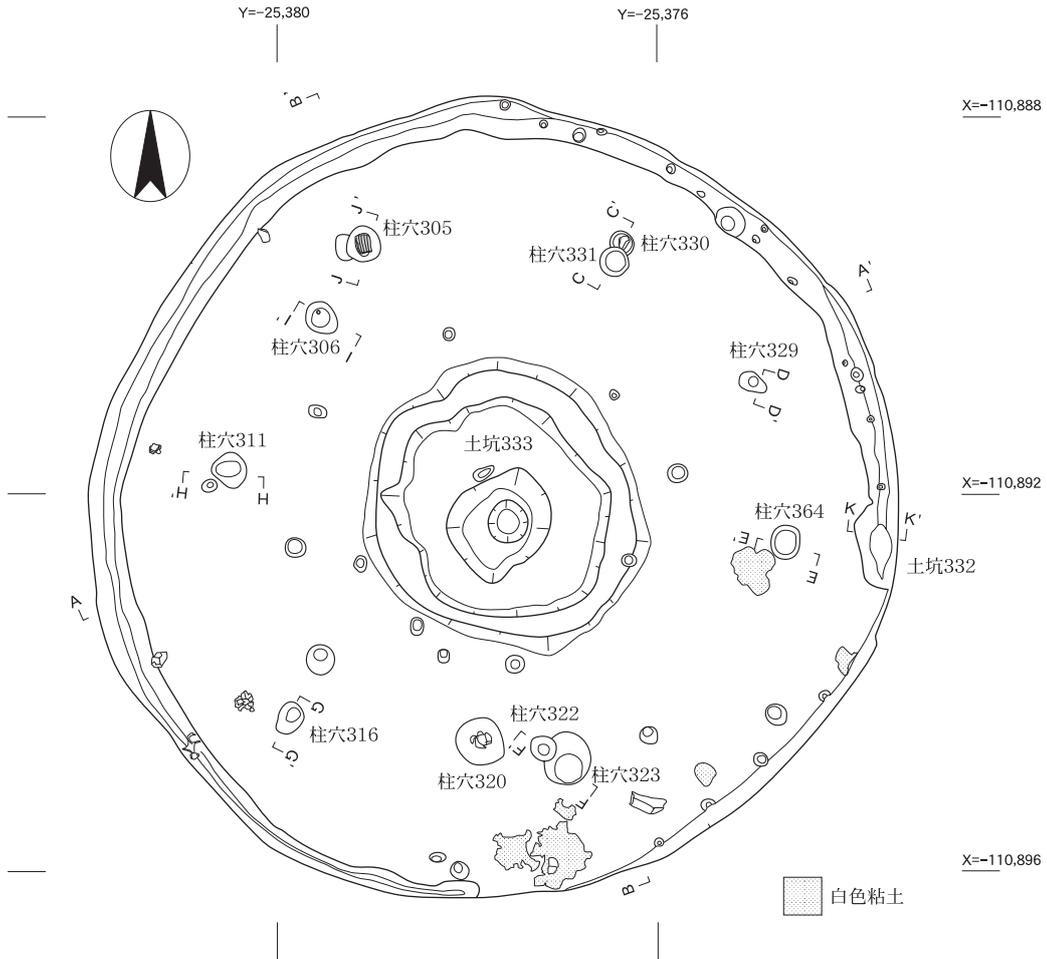


図 25 竪穴住居 188 実測図 (1 : 50)



- |                                 |                      |
|---------------------------------|----------------------|
| 1 10YR5/1 褐灰色シルト、炭化物少量含む、Mg多量含む | 12 10YR4/4 褐色シルト     |
| 2 2.5Y5/1 黄灰色シルト、炭化物中量含む        | 13 10YR5/1 褐灰色シルト    |
| 3 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト             | 14 10YR5/2 灰黄褐色シルト   |
| 4 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト             | 15 10YR4/1 褐灰色微砂     |
| 5 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト             | 16 10YR2/1 黒色粗砂～砂礫   |
| 6 10YR3/1 黒褐色シルト、炭化物少量含む        | 17 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト |
| 7 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂              | 18 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト   |
| 8 2.5Y4/1 黄灰色シルト、炭化物多量含む        | 19 炭化物               |
| 9 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト               | 20 2.5Y3/1 黒褐色シルト    |
| 10 10YR4/2 灰黄褐色シルト              | 21 10YR4/1 褐灰色シルト    |
| 11 5Y5/1 灰色シルト                  | 22 2.5Y5/3 黄褐色シルト    |

図 26 竪穴住居 246 実測図 (1 : 80)

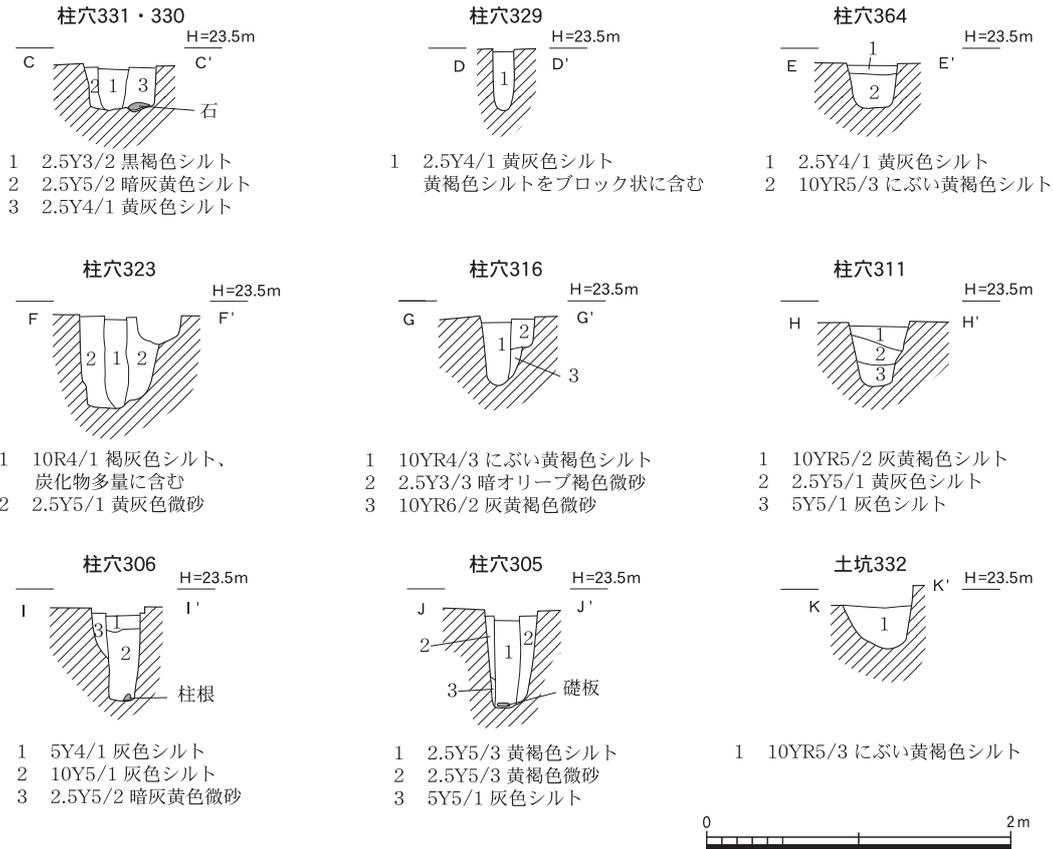


図 27 竪穴住居 246 支柱穴・貯蔵穴断面図 (1 : 50)

埋土から、庄内式併行期の遺物が出土している。床面からは白色粘土塊を確認している。

竪穴住居 250 (図 24) 1区南東部で検出した。方位は N35° W である。平面形は隅丸方形、規模は一辺 5.5 m × 5 m 以上、深さ 0.05 m。壁溝は、幅 0.1 ~ 0.2 m、深さ 0.1 m で、一部途切れている。支柱穴は 3 基確認し、柱穴の掘形は、円形で直径 0.25 m、深さ 0.2 ~ 0.4 m。中央部には土坑 73 を確認した。平面形は楕円形で、直径 0.4 m × 0.5 m、深さ 0.1 m。炉と考えられる。

埋土から、庄内式併行期の遺物が出土している。

竪穴住居 188 (図 25) 1区西部で検出した。方位は N40° W である。平面形は隅丸方形で、南辺を外側に 0.25 m 拡張している。最大で一辺 6 m × 4.5 m 以上、深さ 0.2 m。壁溝は、幅 0.1 ~ 0.15 m、深さ 0.15 m で一部途切れる。支柱穴は 2 基確認している。柱穴の掘形は、不整形な円形で、直径 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.5 ~ 0.6 m。東辺中央には、壁から少し離れて土坑 233 を確認している。平面形は楕円形で、直径 1 m × 0.7 m、深さ 0.3 m で、底部から庄内式併行期の甕が出土している。貯蔵穴と考える。

埋土から、庄内式併行期の土器が出土している。

竪穴住居 384 3区で検出した。南辺の一部を確認したが、大半は調査区外である。深さ 0.4 m。検出した範囲では、壁溝は認められた。規模は、幅 0.2 m、深さ 0.2 m。支柱穴などは確認できなかった。

埋土からは、弥生土器、庄内式併行期の土器が出土している。

竪穴住居 115 1区南端中央で検出した。大半は調査区外である。深さは0.35 m。検出した部分には、壁溝が巡る。壁溝の規模は、幅0.2 m、深さ0.2 m。床面には多量の炭化物、焼土が確認できたことから、焼失住居であることがわかる。炭化物の樹種はクヌギである。

埋土からは、弥生土器の細片が少量出土している。

竪穴住居 246 (図 26 ~ 28) 1区中央部で検出した。平面形は円形で、規模は直径8.4 m、深さ0.5 m。主柱穴は7基。柱穴の掘形は、円形または不整形の円形で、直径0.2 ~ 0.5 m、深さ0.25 ~ 0.6 m。柱穴間は1.6 ~ 3.2 m。中でも、柱穴 305 には礎板、柱穴 330 には根石、柱穴 306 には柱根が認められる。壁溝は、南東部を除いて巡る。東寄りの壁溝が途切れる場所には、土坑 332 を確認した。平面形は楕円形で、直径0.8 m × 0.4 m、深さ0.3 m。貯蔵穴と考える。

床面中央部には、地山を掘り残した堤を持つ土坑 333 を持つ。堤の平面形は楕円形で、幅は0.28 ~ 0.6 m、直径は3.2 m × 3 m、高さ0.04 mである。中央部には、直径0.6 m × 0.5 m、深さ0.4 mにわたって掘り窪められており、底には炭化物が認められることから、炉と考えられる。堤の周囲には、直径0.1 ~ 0.2 m、深さ0.05 mの小柱穴が巡る。

竪穴の埋土は、壁際に、地山に似た褐色シルト層(層)が厚く堆積し、中央に向かって厚みを少なくすることから、竪穴の壁面上部が崩落したものと考えられる。また、8層からは、多量の土器が出土しており、窪んだ場所を人為的に埋め立てた可能性が高い。

遺物は、床面から、弥生時代後期中葉に属する器台、高杯、鉢、壺が出土しており、埋土からは、後期後葉に属する壺、鉢、高杯などが出土している。床面南西部からは、白色粘土塊が多く出土している。

溝 245 (図 29) 1区中央部から北部で検出した。長さは約18 m以上、幅0.6 ~ 1.6 m、深さ0.8 m。断面形は、逆台形状を呈している。埋土には、弥生時代後期中葉に属するものもわずかに含まれていたが、中層から上層にかけては、後期後葉にまとまる遺物が多く出土しており、人為的に埋め戻されたことがわかる。

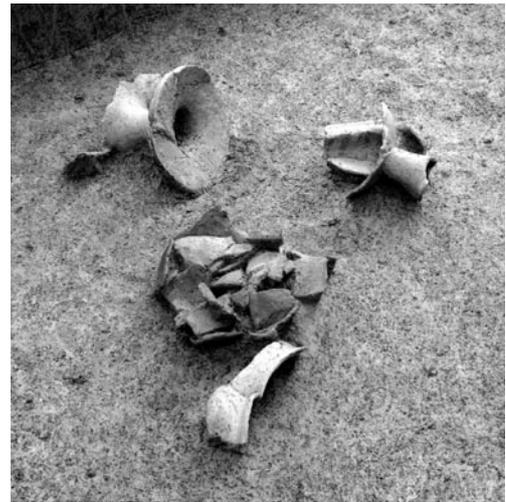
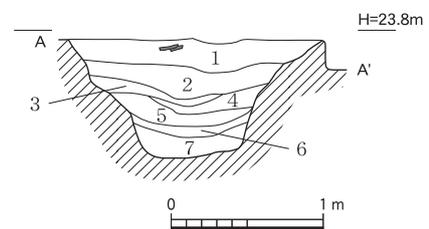


図 28 竪穴住居 246 土器出土状況(北東か)



- 1 2.5Y5/1 黄灰色シルト
- 2 10YR4/1 褐灰色シルト
- 3 10YR3/1 黒褐色シルト
- 4 10YR4/1 褐灰色微砂
- 5 2.5YR4/2 暗灰黄色シルト
- 6 2.5YR4/1 黄灰色シルト
- 7 2.5Y4/3 オリーブ褐色微砂

図 29 溝 245 断面図(1 : 50)

## 4. 遺物

### (1) 遺物の概要 (表2)

遺物は、整理箱にして43箱出土した。種類は、土器、瓦、石器、炭化材がある。時代は弥生時代から近世までのものが出土している。以下に、土器、石器の順で概要をのべる。なお、瓦は溝177や遺物包含層から計7点出土した。全て凸面に縄タタキ、凹面に布目がのこる奈良時代から平安時代の平瓦であるが、小片のため図化していない。

### (2) 土器

出土した土器には、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代から平安時代の土師器・須恵器、平安時代の緑釉陶器、中近世の陶磁器がある。量的には弥生時代から古墳時代の遺物が9割以上を占める。以下に、時期別・遺構別に概要を述べる。遺物の法量、色調、胎土などは表3にまとめた。なお、中近世の土器は全て遺物包含層出土で小片のため図化していない。量は微

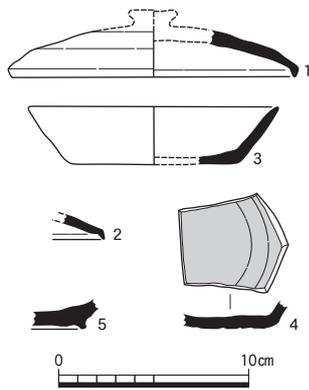


図30 奈良時代から平安時代土器実測図(1:4)

量である。種類は瓦器の椀、瓦質土器の羽釜・鍋、輸入陶磁器の青磁・白磁片、国産の磁器椀などがある。

#### 1) 奈良時代から平安時代 (図30)

1～5は須恵器である。1～5は遺物包含層から出土した。1・2は杯蓋で、口縁部は屈曲せず直線的で端部は下方に突出する。3・4は杯Aである<sup>1)</sup>。3の口縁部は直線的に外上方に開く。4は破片資料であるが、残存部の内面全面に赤色顔料が付着する。5は杯Bである。高さの低い貼付高台をもつ。図化したもの以外に溝178や柱穴6・93などからも杯Aないしは杯Bの口縁部片が出土して

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代～古墳時代前期	弥生土器、庄内式土器	42箱	弥生土器・庄内式土器89点	36箱	0箱
	石器		石器11点		
古墳時代中期～後期	土師器、須恵器	6箱	土師器6点、須恵器16点	4箱	0箱
奈良時代～平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器	3箱	須恵器5点	2箱	1箱
中近世	磁器、輸入陶磁器、瓦器、瓦質土器			0箱	
合計		51箱	127点(8箱)	42箱	1箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より8箱多くなっている。

いる。これら須恵器の帰属時期については、1・2の杯蓋の形状は奈良時代もしくは長岡京期に遡る可能性のある特徴を示すが、土師器が伴わず時期決定の決め手を欠く。少なくとも奈良時代から平安時代前期の範疇におさまるものと考えられる。遺物包含層からは、平安時代前期の軟質の緑釉陶器碗の破片が1点出土している。

## 2) 古墳時代中期から後期(図31、図版7)

6～16は溝186から出土したものである。6は土師器甕で、体部外面縦ハケ、内面はナデにより仕上げる。外面には煤が付着する。7～16は須恵器である。7・8は壺の口縁部で、7の口縁部外面には10条1単位の波状文をめぐらせる。9～14は杯蓋。口径は12.0～13.0cmの間でまとまる。口縁端部のつくりは、丸くおさめるもの(12・13)、沈線がめぐるもの(9・10・14)、平らな面をもつもの(11)がある。天井部のヘラケズリは約1/2～2/3までに留まる。9は扁平なつまみが付く。15は杯身で口縁部を欠損する。受け部は短く水平にのびる。底部のヘラケズリは約2/3までおよぶ。16は有蓋高杯である。脚部には円形の三方透かしを入れる。脚端部は上下に拡張する。杯部の大半を欠損する。

17～20は土坑187から出土したものである。17は土師器甕で、口縁部はやや内湾して斜上方に立ち上がり、端部は尖りぎみにおさめる。肩部は直線的で、長胴形になるものと思われる。18～20は須恵器である。18は壺の口縁部である。外反して大きく開く。端部は段をもつ。体部外面は平行タタキのちナデ、内面は同心円状の当て具痕をナデ消す。19は杯身である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は内傾して面をもつ。外面のヘラケズリは約4/5までおよぶ。20は有蓋高杯である。脚部は欠損するが、剥離痕跡から方形の三方透かしをもつものと考えられる。杯部の器壁は薄く、受け部はシャープで口縁部は外湾して立ち上がる。端部は外上方につまみ上げ、内傾して浅い沈線がめぐる。

21～23は柱穴391から出土したものである。21は土師器の椀形高杯である。杯部口縁は内湾して立ち上がる。脚柱部はエンタシス状で、脚裾は明瞭な屈曲点をもって大きく広がる。22・23は須恵器杯蓋と杯身である。22は扁平なつまみが付く。器壁は薄い。口縁部は垂直に立ち上がり、端部は内傾する面をもつ。天井部のヘラケズリは約4/5までおよぶ。23は、受け部が水平に短く伸び、底部は丸みをおびる。ヘラケズリは約2/3におよぶ。

24は、竪穴住居192の周溝193から出土した須恵器杯身である。受け部は短く水平にのびる。口縁部は外湾ぎみに立ち上がり、端部は丸くおさめる。底部のヘラケズリは約7/8までおよぶ。

以上の溝186、土坑187、柱穴391、溝193出土の須恵器は、陶邑編年<sup>2)</sup>ではTK47型式に位置付けられるものである

25・26は竪穴住居189に伴う土坑221出土の土師器甕である。25は小型で、口縁部はやや内湾して立ち上がり、端部はわずかに肥厚して丸くおさめる。体部は球形で、外面下半は縦ハケ目、上半は横ハケ目である。内面はヘラケズリで、底部には指頭圧痕がつく。26の口縁部は内湾して立ち上がり、端部は肥厚して水平な面をもつ。

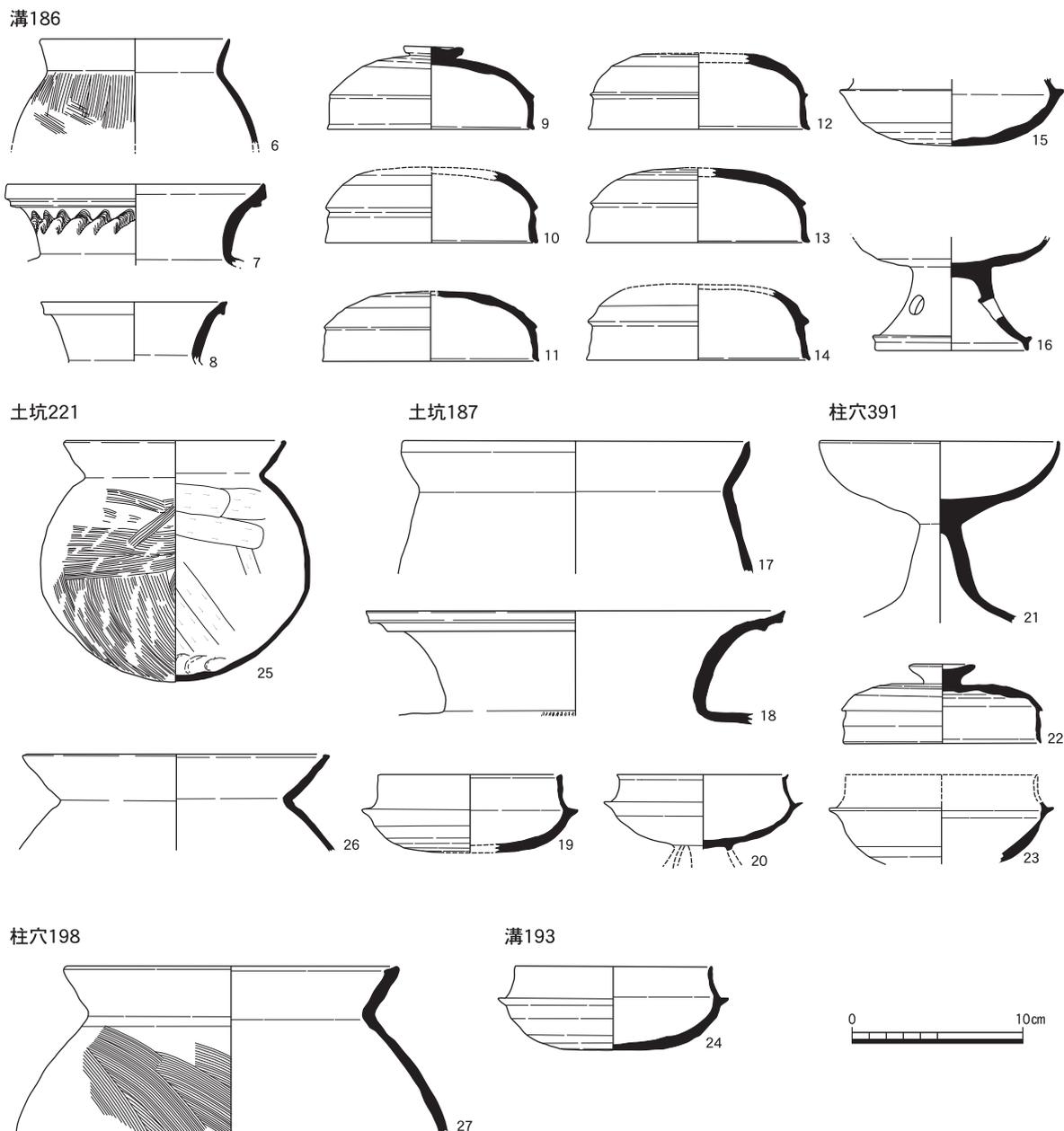


図 31 古墳時代中期から後期土器実測図（1：4）

27 は柱穴 198 から出土した土師器甕である。口縁部は直線的に斜上方に立ち上がり、端部は内傾して面をもつ。口縁部内面をヘラ状工具により横ナデし、端部との間に段差をつくる。体部外面は斜ハケ目、内面はナデで仕上げる。

以上の土坑 221、柱穴 198 出土の土師器は、口縁端部が肥厚し、体部が球形化するなど布留式期の甕の特徴を残すことから 5 世紀中葉頃に位置付けられる。

### 3) 弥生時代後期から古墳時代前期（図 32 ～ 36）

弥生時代後期から古墳時代前期初頭（庄内式併行期）に位置付けられる資料には、竪穴住居 188・216・242・243・246・250・300、溝 245、柱穴 320・322 出土のものがある。一括性

を重視して遺構単位で出土土器の概要を述べる。なお、当遺跡は古墳時代前期初頭（庄内式併行期）に生駒西麓産の庄内型甕が搬入されるが、基本的には弥生時代の土器様式から連続した土器を使用している段階と捉えることができるため、庄内式併行期の土器も弥生土器の形式分類に従い分類する。弥生土器の形式分類は、過去の西京極遺跡<sup>3)</sup>の報告を基に、新たに出現したものを加えて以下のように設定する。

#### 甕

口縁部の形態により3つに分類する。

- <甕A> 頸部が強く外反して口縁部が上方に立ち上がり、受口状になるもの。口縁部に装飾を施す。近江系。
- <甕B> 頸部が外反して、口縁部が上方に立ち上がり、受口状になるもの。口縁端部は丸くおさめ、基本的には無文である。
- <甕C> 口縁部が「く」の字状に外反するもの。

#### 壺

口頸部の形態により分類する。

- <直口壺> 口縁部が直線的に斜上方へのびるもの。
- <広口壺> 直線的にのびる頸部から口縁部が大きく開くもの。
- <短頸壺> 頸部が直線的に立ち上がり、頸部の長さが体部の器高の1/2以下のもの。

#### 高杯

杯部と脚部に分けて分類する。

##### 杯部

- <皿形高杯A> 皿形の杯部で、口縁部が外反するもの。
- <皿形高杯B> 皿形の杯部で、口縁部が直立するもの。
- <椀形高杯> 椀形の杯部をもつもの。

##### 脚部

- <脚部a> 脚柱から脚裾にかけてゆるやかに短く開くもの
- <脚部b> 脚柱から脚裾にかけてゆるやかに大きく開くもの。
- <脚部c> 脚裾が明瞭な屈曲点をもって大きく開くもの。

#### 器台

全体の形状から分類する。

- <器台A> 脚裾部、口縁部ともにゆるやかに短く開き、直線的で長い筒部に凹線文をめぐらせるもの。
- <器台B> ゆるやかに開く脚裾から筒部が直線的に立ち上がり、口縁部がゆるやかに大きく開くもの。
- <器台C> 脚裾部、口縁部ともに明瞭な屈曲点をもって大きく開くもの。口縁端部は装飾的。
- <器台D> 口縁部と脚部が明瞭な屈曲点をもたず開き、対称形をなすもの。

<器台E> 浅い皿状の杯部をもつ小型のもの。

### 鉢

<鉢A> 頸部が外反して口縁部が上方に立ち上がり、受口状になるもの。口縁部に装飾を施す。体部は扁球形。

<鉢B> 体部から口縁端部まで逆「ハ」の字状に開くもの。

<鉢C> 甕Cの下半部と共通するもの。外面にタタキ目がのこる、もしくはタタキ目をナデ消す。

<鉢D> 平底の底部から体部が立ち上がり、口縁部が短く外反して開くもの。小型。

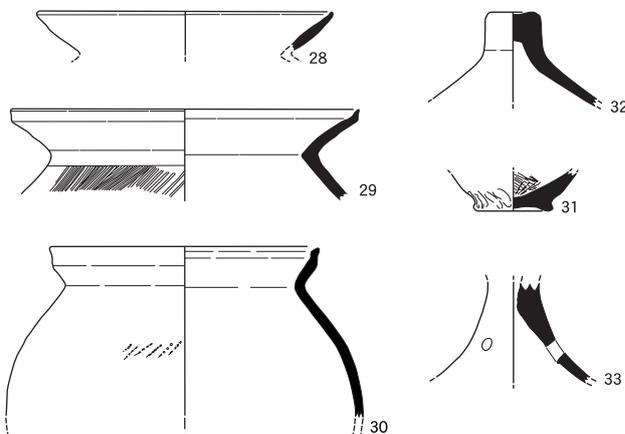
<鉢E> 底部に穿孔のあるもの。

<鉢F> 手づくねで成形されるもの。ミニチュア土器。

<鉢G> 底部から口縁部まで屈曲点をもたずに立ち上がるもの。

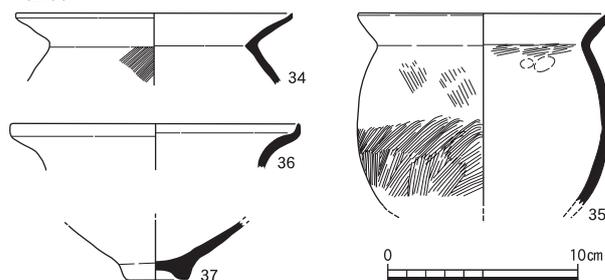
竪穴住居 243 (28～33) (図 32) 28・29 は住居の床面直上で出土した胎土に角閃石を含む生駒西麓産の庄内型甕である。28 は口縁部のみ残存する。口縁端部はわずかに上方につまみ上げる。胎土には角閃石の他、雲母を少量含む。29 は、口縁端部を強くつまみ上げて突出させる。体部外面は右上がりのタタキ目、内面は頸部直下までヘラケズリする。30 は甕 B である。頸部の屈曲、口縁の立ち上がりの屈曲ともに弱い。端部は内傾して面をもつ。体部は丸みをおび、肩部に列点文をめぐらせる。31 は鉢 C である。底部はわずかに上げ底で、外面には指頭圧痕が明瞭につく。

#### 竪穴住居243



底部内面はクモの巣状ハケ目。32 は蓋である。33 は b 形態の高杯脚部である。円形の三方透かしを入れる。

#### 竪穴住居300



竪穴住居 300 (34～37) (図 32) 34 は竪穴住居の貼床から出土した生駒西麓産の庄内型甕である。口縁端部は上方につまみ上げる。体部外面は右上がりのタタキ目、内面は頸部直下までヘラケズリする。胎土に角閃石を含む。35 は甕 C である。口縁端部は丸くおさめる。体部外面はタタキのちハケ調整、内面はナデ上げて頸部付近を一部横ハケ調整する。外面下半には煤が付着する。36 は広口壺である。口縁端部を上方につまみ上げ、受口状になる。頸部には白色粘土、口縁部には赤色の粘土を用いる。37 は壺底部で

図 32 竪穴住居 243・300 出土土器実測図 (1:4)

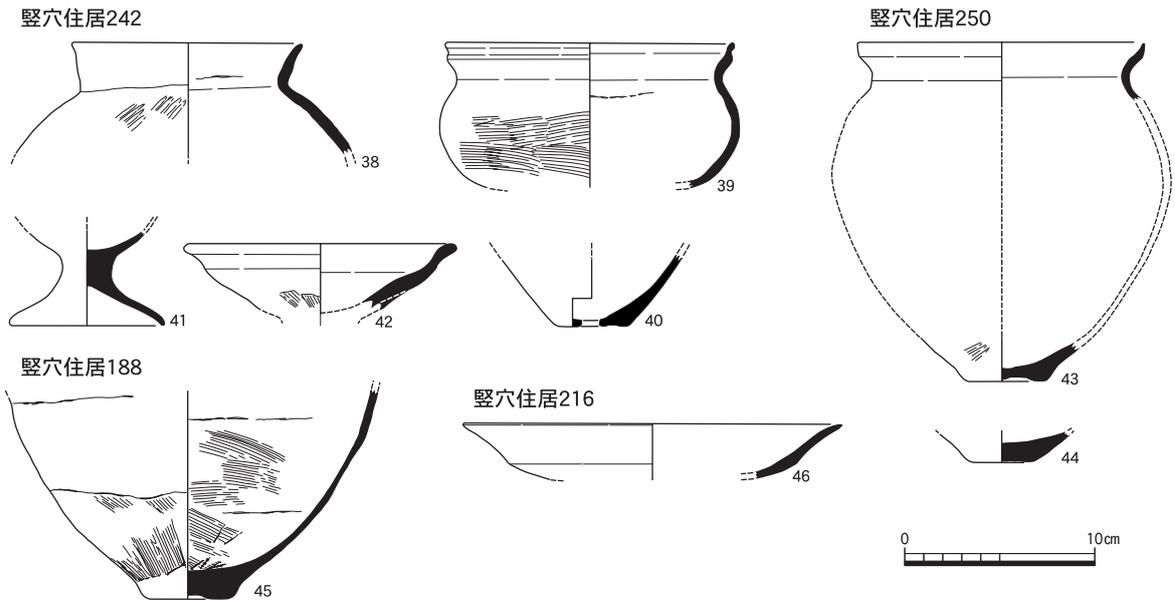


図 33 竪穴住居 188・216・242・250 出土土器実測図（1：4）

ある。上げ底で、体部は開きぎみに立ち上がる。

竪穴住居 242 (38～42) (図 33、図版 7) 38 は甕 C である。体部外面は 3 本 / cm の粗い右上がりのタタキ目、内面はナデで仕上げる。39 は鉢 A である。頸部の屈曲は弱く、口縁部は強く横ナデする。端部は丸くおさめる。頸部から口縁部の形状は甕 B と共通する。体部は扁球形を呈し、外面下半はタタキ目のち横ハケ、上半はタタキ目をのこす。内面はナデで仕上げる。40 は鉢 E である。底部は焼成前に穿孔する。41 は器台 E である。浅い椀状の杯部をもつものと考えられる。42 は皿形高杯 A である。器壁は厚い。口縁部は強い横ナデにより外反するもので、厳密には口縁部を二次的に接合し、底部と口縁部の境に明瞭な段を持つ皿形高杯 A とは系譜が異なるものである。底部外面は板ナデ状のハケ目がのこる。これらは、甕や鉢の外面にタタキ目がのこることや、小型の器台の存在から弥生時代後期終末段階に位置付けられる。

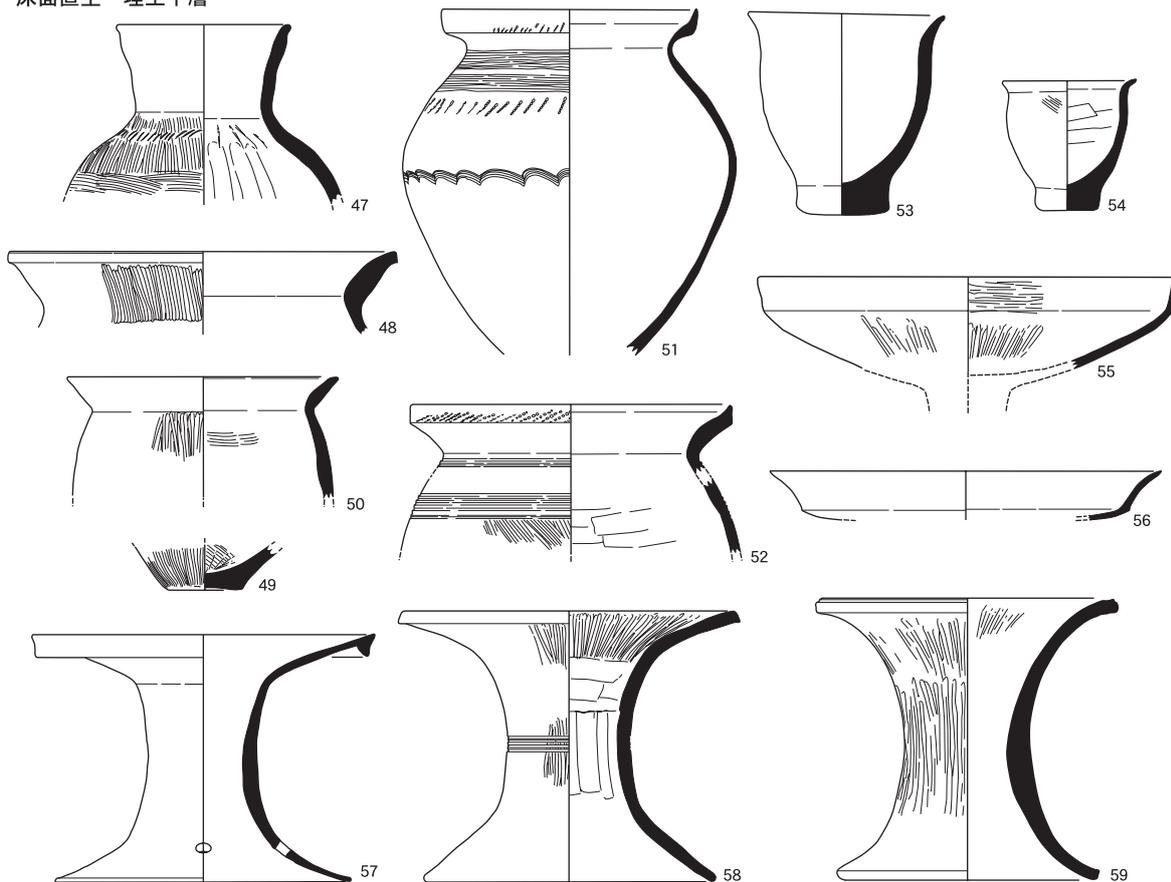
竪穴住居 250 (43・44) (図 33) いずれも床面直上から出土した。43 は甕 B である。頸部の屈曲は弱く、端部はわずかに上方につまみ上げる。底部は上げ底で、外面下半にはタタキ目がのこる。44 は甕底部である。平底で、外面はタタキ目をナデ消す。二次焼成を強く受ける。弥生時代後期終末段階に位置付けられる。

竪穴住居 188 (45) (図 33、図版 7) 45 は竪穴住居 188 に伴う土坑 233 から出土した壺である。下半部のみ完存する。底部は上げ底で、体部外面は縦ハケ目をナデ消す。内面はハケ目のちナデ上げで、粘土紐接合痕が明瞭にのこる。弥生時代後期終末段階に位置付けられる。

竪穴住居 216 (46) (図 33) 46 は住居の床面直上で出土した皿形高杯 A である。口縁部が外反して大きく開く。弥生時代後期終末段階に位置付けられる。

竪穴住居 246 (47～76) (図 34、図版 8・9) 47～59 は、竪穴住居の床面直上および埋土下層から出土した土器である。47 は直口壺で、丸みをもつ肩部から口縁部が直線的に立ち上がる。口縁部は内外面ともに横ナデで仕上げる。体部外面は横ハケ目、肩部は縦ハケを加え、頸部下に

床面直上・埋土下層



埋土上層

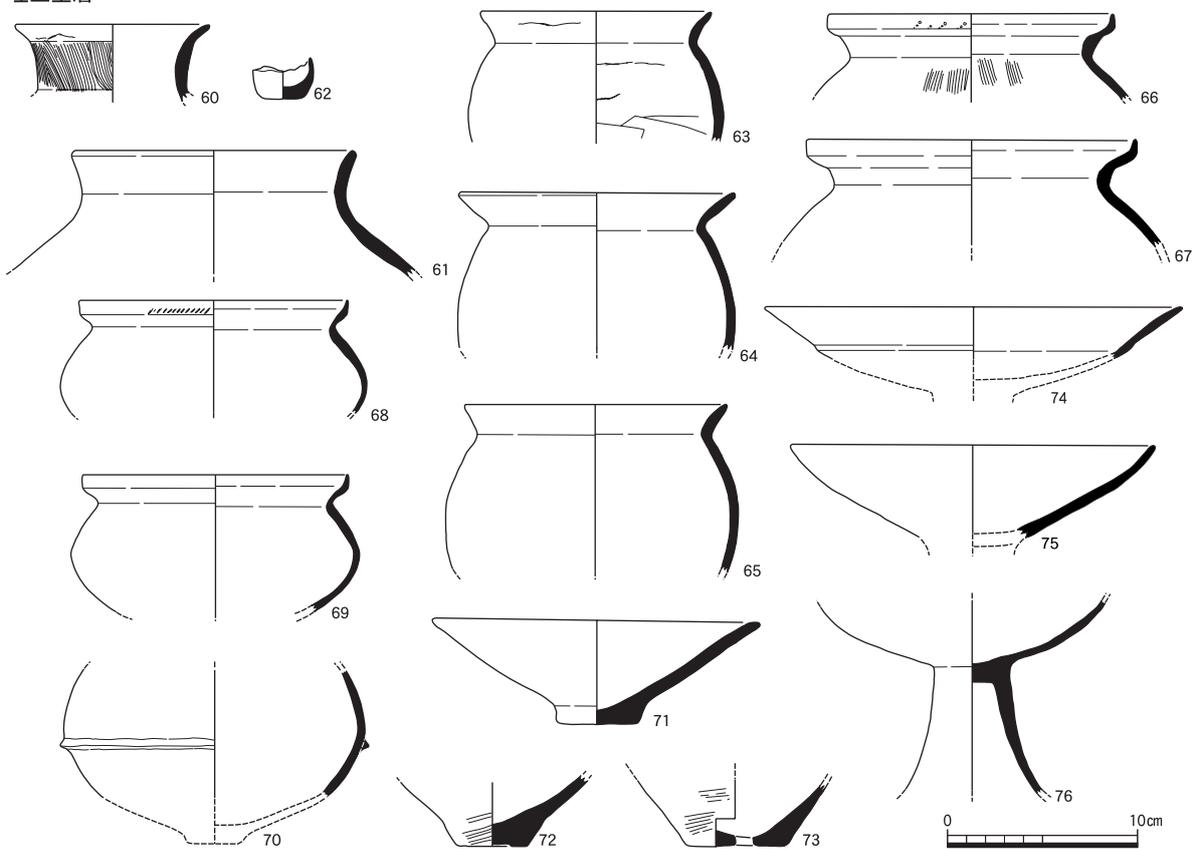


图 34 豎穴住居 246 出土土器实测图 (1 : 4)

刻目をめぐらせる。内面はナデ上げで、頸部には絞目がみられる。48は広口壺である。口縁部は短く外反して開き、端部は面をもつ。外面には密な縦ヘラミガキをほどこす。内面はナデで仕上げる。49は壺底部である。平底で、体部外面は縦ハケ目、内面底部はクモの巣状ハケ目である。50は甕C。体部外面に縦ヘラミガキをほどこす。内面は横ハケ目。51・52は甕Aである。51の口縁部はわずかに開きぎみに立ち上がる。端部は尖る。口縁部には刻目をめぐらせる。体部の最大径は上位にある。体部外面には、頸部直下から5条1単位の櫛描の直線文2段、列点文、直線文、上向き連弧状文を順にめぐらせる。内面はナデで仕上げる。52は口縁端部をつまみ上げて受口状にし、外面に列点文をめぐらせる。体部は縦ハケ目ののち肩部に6条1単位の櫛描直線文を2段めぐらせる。内面は板ナデする。53・54は鉢Dである。53は、底部未調整、体部はナデで仕上げる。口縁部の屈曲は弱い。54は底部はナデ、体部外面ハケ目のちナデ、内面は板ナデする。口縁部は横ナデし強く外反する。55は皿形高杯Bである。底部は内外面ともに縦ヘラミガキ、口縁部内面は横ヘラミガキを加える。56は皿形高杯A。口縁部の立ち上がり角度は約45度ある。57は器台Cである。口縁部は屈曲点をもって大きく開く。口縁端部は粘土貼付により垂下させる。裾部に円形の四方透かしを入れる。二次焼成を受け、調整は不明である。58・59は器台Bである。58は裾部、口縁部ともに筒部から連続して大きく開く。外面は、全面縦ヘラミガキしたのち筒部に4条の凹線をめぐらせる。内面は口縁部を縦ヘラミガキ、筒部は板ナデする。59の裾部と口縁部は筒部から明瞭な屈曲点を持たずにゆるやかに開く。口縁部内外面と筒部外面は縦ヘラミガキ、それ以外はナデにより仕上げる。これらは、弥生時代後期中葉に位置付けられる。

60～76は住居の埋土上層から出土した土器である。床面および埋土下層出土の一群より新しい様相を示す。60は広口壺である。外面縦ハケののち、口縁端部は強い横ナデにより開く。61は直口壺である。肩部から口縁部が短く立ち上がる。62は鉢Fである。手づくね成形で、二色の異なる粘土を使用している。63～65は甕Cである。いずれも体部外面はハケ目をナデ消す。内面は63が板ナデ、他はナデで仕上げる。66は甕A、67は甕Bである。66は口縁部を横ナデしたのちやや間隔をあけて端部に列点文をめぐらせる。体部は内外面ともに縦ハケ目をナデ消す。68～70は鉢A。68は口縁端部に刻目をめぐらせる。68・69の体部はナデで仕上げる。70は体部最大径が中位にあり、それよりやや下に無文の貼付突帯がめぐらせる。手焙形土器の可能性はある。71は鉢Bである。体部から口縁部まで直線的に大きく開く。72は鉢C、73は鉢Eである。いずれも外面にタタキ目をのこす。74は皿形高杯Aである。口縁部は大きく開き、底部と口縁部の境の屈曲点は不明瞭で、わずかに段をもつ。75・76は椀形高杯である。75の杯部は浅く皿状で、口縁端部がわずかに内湾する。76は口縁部と脚裾部を欠損するが、やや深い椀状の杯部をもつものと考えられる。これら埋土上層出土の土器は弥生時代後期後葉に位置付けられる。

溝245(77～114)(図35、図版8・9) 溝245からは、整理箱にして約10箱の土器が出土した。77～80は広口壺である。77は直立する頸部から口縁部が大きく水平に開く。端部はつまみだして垂下させる。頸部外面は縦ハケ目、内面は横ハケ目。溝245出土土器の中ではやや古相を示す土器で、混入品の可能性がある。78は口縁端部をつまみ上げ受口状になる。79・80は口

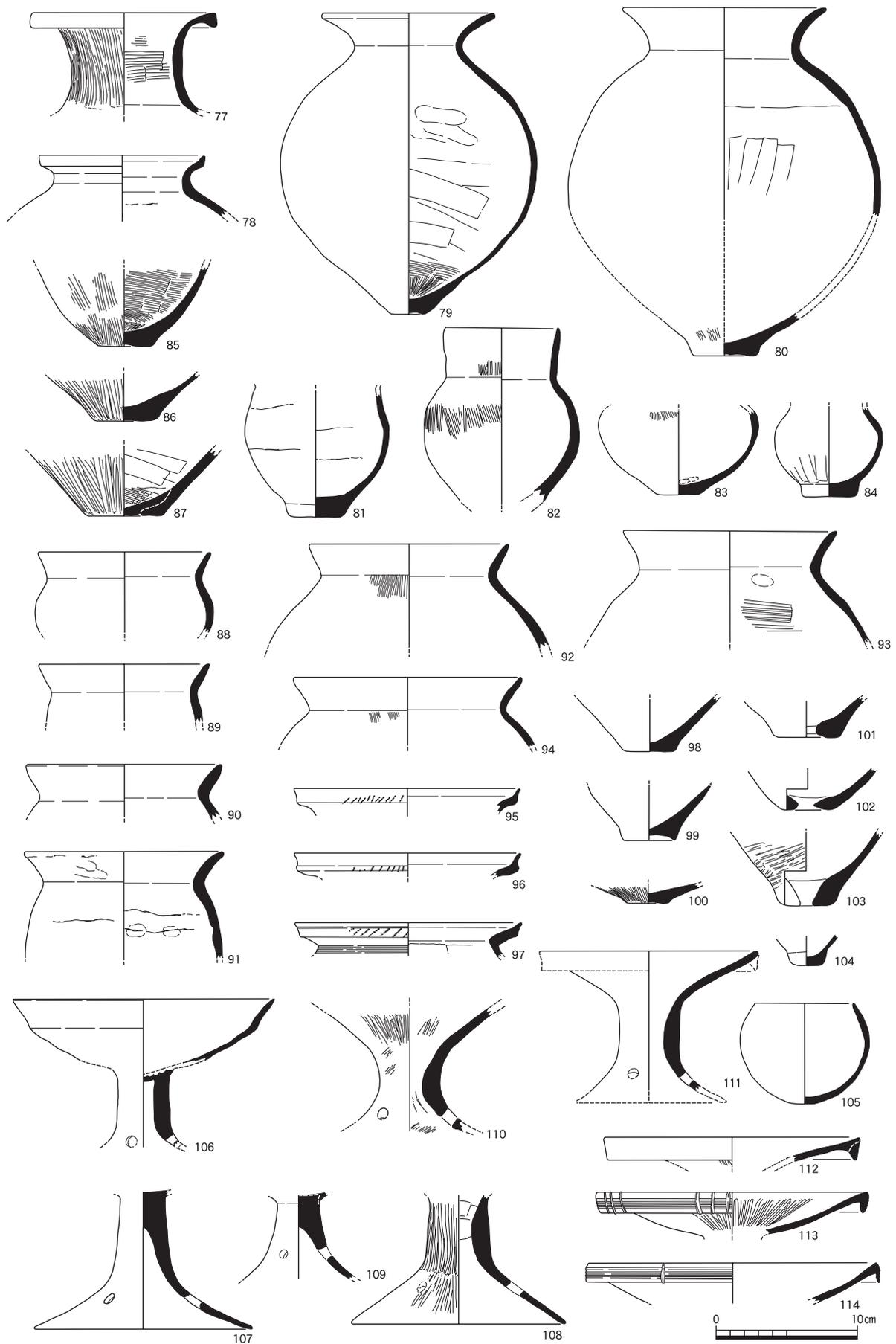


图 35 沟 245 出土土器实测图 (1 : 4)

縁部が大きく外反してくの字状に開く。79の底部は矮小化した上げ底で、接地面は極小さく自立は不可能である。外面は磨滅が著しいが、下半にはヘラミガキの痕跡がのこる。内面底部ハケ目、体部下半は板ナデ、体部上半はナデで仕上げる。80は平底で、体部の最大径は下位にあり下膨れの形状を示す。外面底部付近は縦ハケ目をナデ消す。81は壺の体部である。形状から短頸壺と考えられる。粘土紐接合痕が明瞭にのこる。82は短頸壺である。頸部は直立し、口縁端部は尖る。外面は縦ハケ目、口縁部と体部内面はナデで仕上げる。83は壺の体部である。平底で扁球形を呈する。84は鉢Dである。形状的には壺であるが、竪穴住居246出土の鉢D(53・54)と同じ系譜上にあるものと考えられることから鉢とした。85～87は壺の底部である。85は外面縦ハケ目、内面は横ハケ目である。86は外面縦ヘラミガキ、内面はナデ。87は外面縦ヘラミガキ、内面底部付近はクモの巣状ハケメ、他は板ナデする。88～94は甕Cである。90は口縁部に赤色の粘土、頸部より下には白色の粘土を用いている。95～97は甕Aである。口縁部に列点文をめぐらせる。97は端部をつまみあげて受口状にし、列点文の上に1条の凹線をめぐらせる。頸部には櫛描直線文をめぐらせる。98は壺の底部である。底部と体部の境を強くナデる。99は鉢Cである。上げ底で体部は上方に立ち上がる。100は鉢Aの底部と考えられる。外面は縦ハケ目。101～103は鉢Eである。101・102は内外両側から焼成前に穿孔する。103は内側から焼成前に穿孔する。外面はタタキ目がのこる。104は鉢Fである。底部は平底で、体部はわずかに開く。器壁は薄い。105は鉢Gである。丸底で、口縁部は内湾して窄まる。器壁は薄い。106は皿形高杯Aである。脚裾部は欠損するが、脚部c形態と考えられる。脚柱部と裾部の境に円形の三方透かしを入れる。脚柱部は中空である。杯部口縁の立ち上がり角度は約45度ある。107～109は高杯脚部である。107・108は脚部c形態。107の脚柱部は中実である。裾部に円形の三方透かしを入れる。108は外面に丁寧な縦ヘラミガキをほどこす。脚柱部は中空。109は脚部b形態でやや小型。脚柱部は中実である。わずかに残存する杯部には白色粘土、脚部は赤色粘土を用いる。脚部に円形の三方透かしを入れる。110は器台Dである。口縁部は内外面とも縦ヘラミガキ、裾部はハケ目をナデ消す。裾部に円形の三方透かしを入れる。111～114は器台Cである。111はやや細い筒部から口縁部が大きく開く。端部外面に粘土剥離痕がみられ、粘土貼付による垂下部が剥離したものと考えられる。112～114も粘土貼付により口縁端部を垂下させる。113は垂下部に4条の凹線をめぐらせ、3本1組の棒状浮文を一定の間隔をおいて貼り付ける。口縁部は内外面とも丁寧に縦ヘラミガキする。114は垂下部に3条の凹線をめぐらせ、棒状浮文を貼り付ける。残存は1本のみで貼付の間隔は不明である。これらの土器は、弥生時代後期後葉から後期終末段階に位置付けられる。

柱穴320・322(115・116)(図36、図版8) 115・116は柱穴320と321から出土したものである。柱穴320・322は竪穴住居246の下面で検出した柱穴である。115は

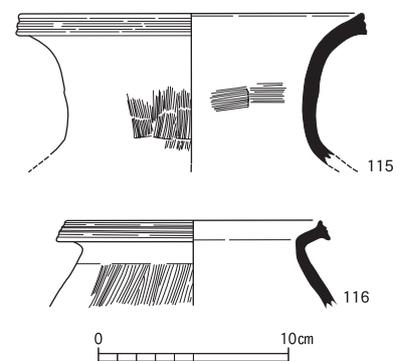


図36 柱穴320・322出土土器実測図(1:4)

広口壺で、直立する頸部から口縁部が強く外反して開く。口縁端部は上下に拡張し、2条の凹線をめぐらせる。頸部外面は縦ハケ目、内面は横ハケ目である。116は甕Cである。直線的な肩部から口縁部が強く外反して開く。口縁端部は上下に拡張し、3条の凹線をめぐらせる。体部外面は縦ハケ目、内面はナデで仕上げる。これらの土器は、口縁端部にみられる凹線文や甕口縁の屈曲度、直線的な肩部の形状などから弥生時代中期後葉から後期初頭のものと考えられ、今回の調査で出土した中では最も古相に位置づけられる。

## (2) 石器 (図 37・38、図版 10)

石器は混入と思われるものも含め 11 点出土した。出土遺構、大きさ、重量などの詳細は表 4 にまとめた。117 は石包丁である。大部分を欠損する。両側から穿孔するが、孔の位置が上下にずれ、貫通しない。表面には二次的な擦痕が、裏面には摩擦痕がみとめられる。118 は、太型蛤刃石斧である。基部の大部分を欠損する。刃先は平滑であるが、加工時の摩擦痕と考えられ、使用痕はみとめられない。119 は敲石である。両側面を打ち欠き、先端には敲打痕がみとめられる。表裏面とも平滑で磨製石斧を敲石に転用した可能性が考えられる。120 は用途不明であるが、表面は手擦れと思われる摩擦痕があり平滑である。121 は敲石と考えられるものである。片側の先端にわずかに敲打痕がのこる。122～125 は砥石である。122 は、3面に砥面がみとめられ、うち2面は磨滅によりレンズ状に凹む。123 は大部分を欠損するが、1面に砥面がみとめられ、中央が磨滅により溝上に凹む。124 は、剖面以外のすべての面に砥面がみとめられる。表面は磨滅により大きく凹み、裏面には擦痕がつく箇所がある。125 は扁平で、表面の1面のみに砥面がみとめられる。裏面は剥離する。表面は平滑である。126・127 は石皿である。126 は扁平で、表面の砥面には幅 1～1.3 cm の浅い溝状の凹みが斜方向にはしる。裏面は被熱により剥離する。127 は竪穴住居 246 の床面に据えられていた大型のもので、2面が砥面で、非常に平滑で光沢がある。

### 註

- 1) 奈良時代の土器の形式分類は、奈良文化財研究所編『平城宮発掘調査報告 XVI』2005年に従った。
- 2) 須恵器の型式名については、田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年に従った。
- 3) 柏田有香『平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-30 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年

### 参考文献

- 『古代の土器1 都城の土器集成』古代の土器研究会 1992年  
田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年  
辻 美紀「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室 1999年  
平井 勝『弥生時代の石器』ニューサイエンス社 1991年  
森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社 1990年

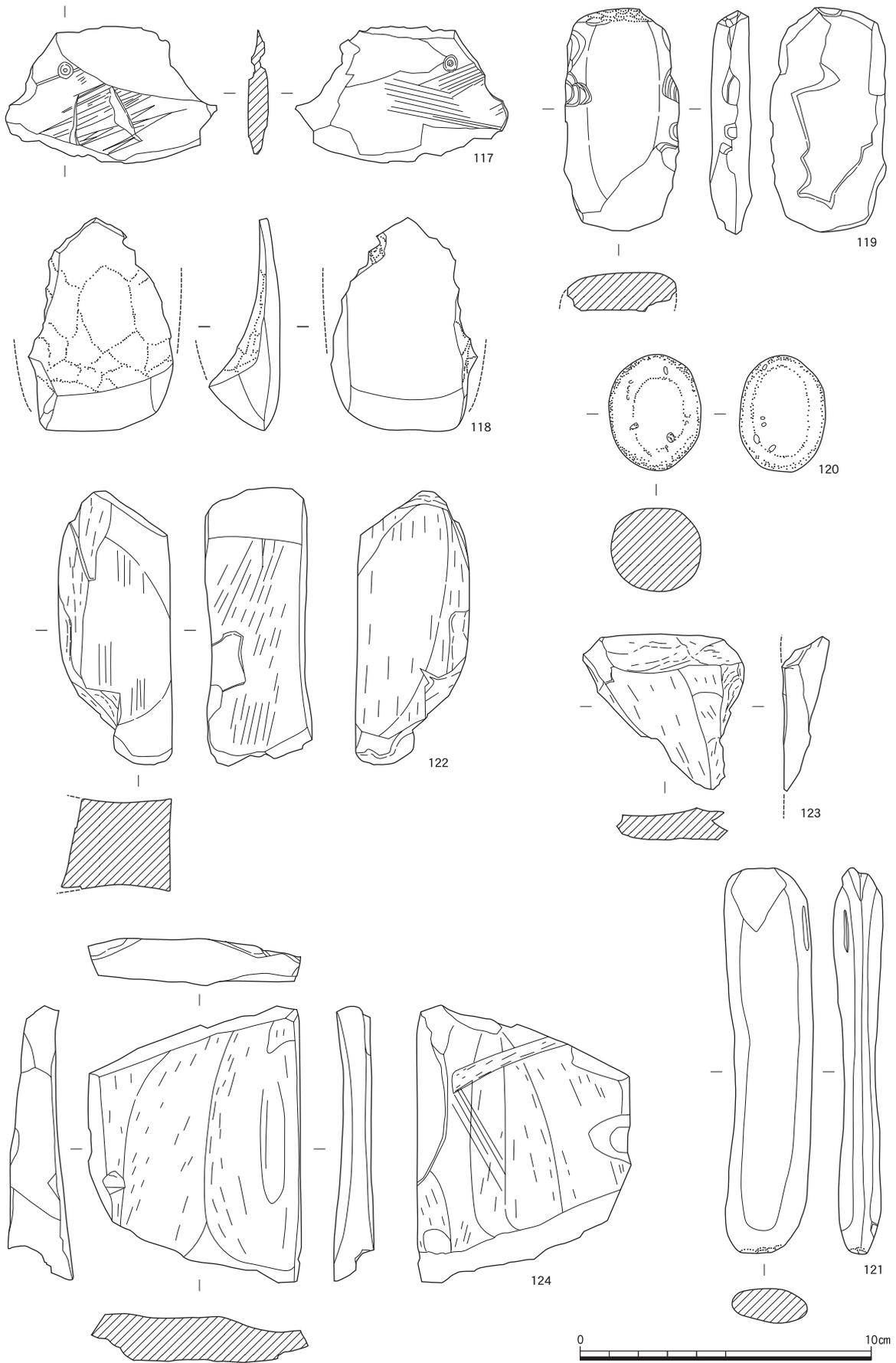


图 37 石器实测图 (1 : 2)

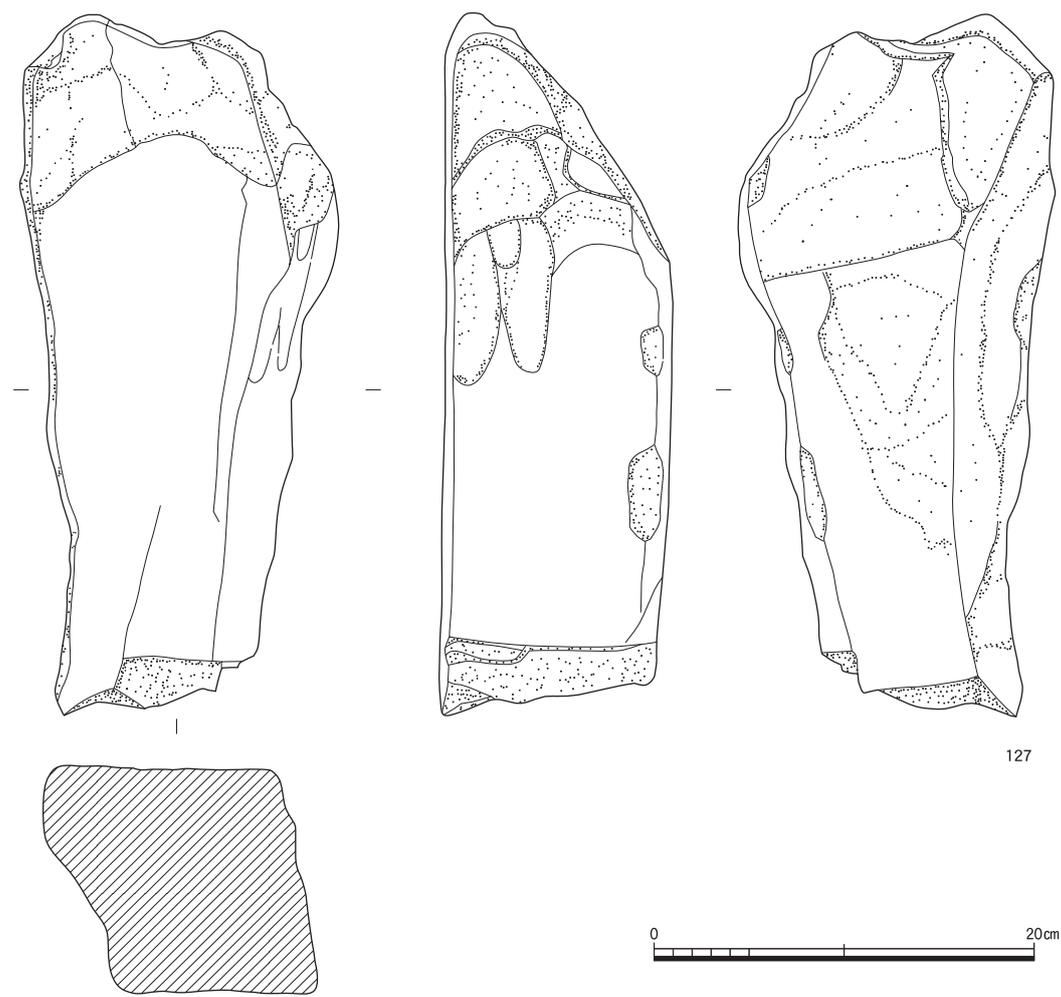
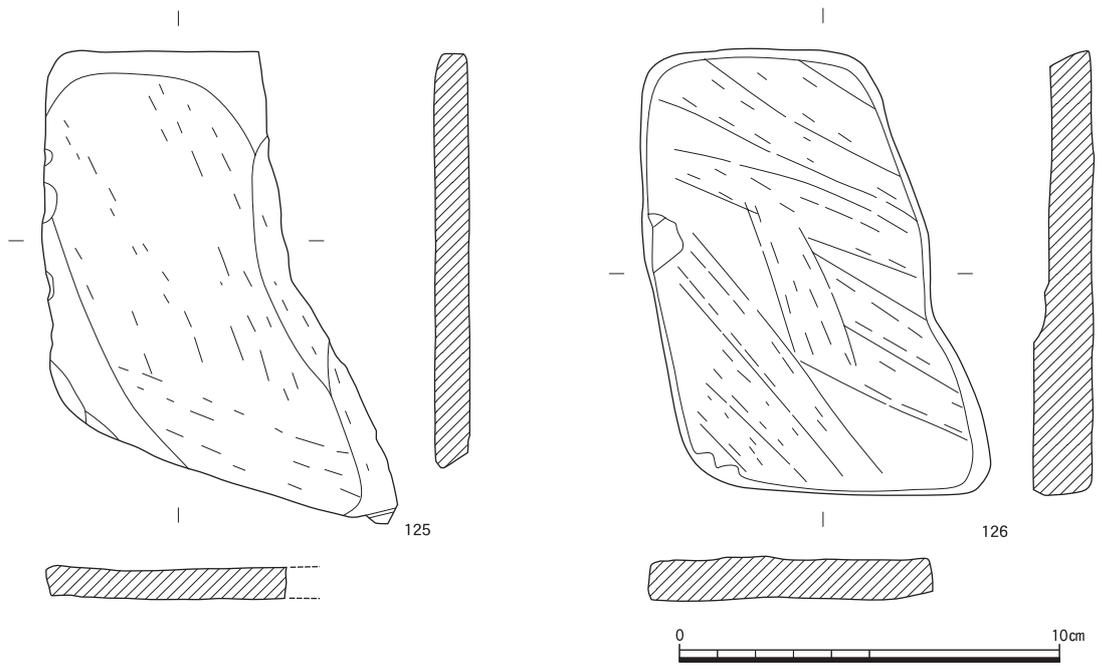


图 38 石器实测图 (1 : 2、1 : 4)

表3 土器観察表

No.	器種	器形	遺構/層位	口径	器高	底径	色調	備考
1	須恵器	杯蓋	遺物包含層	(14.8)	<2.5>		N6/0灰色	残存1/10。胎土精良。
2	須恵器	杯蓋	遺物包含層		<1.3>		N7/0灰白色	残存1/10以下。胎土精良。
3	須恵器	杯A	遺物包含層	(13.0)	3.1	(8.4)	N7/0灰白色	残存1/8。胎土精良。
4	須恵器	杯A	遺物包含層				N8/0灰白色	残存1/10。胎土精良。内面に朱付着。
5	須恵器	杯B	遺物包含層				N8/0灰白色	残存1/10。胎土精良、1mm以下の白色砂粒微量含。
6	土師器	甕	溝186	(11.0)	<6.2>		7.5YR6/4にぶい黄橙色	残存1/8。胎土精良、0.5~1mmの石英・長石少量、クサリ礫少量含。
7	須恵器	壺	溝186	(15.0)	<4.8>		N5/0灰色	残存頸部1/3。胎土精良。
8	須恵器	壺	溝186	(10.8)	<3.5>		N5/0灰色	残存口縁1/8。胎土精良。
9	須恵器	杯蓋	溝186	12.0	4.9		N6/0灰色	ほぼ完形。胎土精良、1mm以下の白色砂粒少量含。ロクロ左回転。
10	須恵器	杯蓋	溝186	12.3	<4.2>		N7/0灰白色	残存1/4。胎土に1~5mmの白色砂粒少量含。ロクロ左回転。
11	須恵器	杯蓋	溝186	12.6	4.1		N6/0灰色	残存1/2。胎土精良、1.5mm以下の白色砂粒少量含。ロクロ左回転。
12	須恵器	杯蓋	溝186	(12.9)	<4.5>		N6/0灰色	残存1/8。胎土精良。ロクロ左回転。
13	須恵器	杯蓋	溝186	13.0	<4.4>		N6/0灰色	残存1/2。胎土精良。ロクロ左回転。
14	須恵器	杯蓋	溝186	(13.0)	<3.6>		N6/0灰色	残存1/6。胎土に0.5~2mmの白色砂粒、1mm以下の黒色粒少量含。外面に自然釉付着。
15	須恵器	杯身	溝186		<3.5>		N6/0灰色	残存1/3。胎土に0.5~2mmの白色砂粒少量含。ロクロ右回転。
16	須恵器	高杯	溝186		<6.7>	8.8	N7/0灰白色	脚部完存、杯部残存1/8。胎土精良。
17	土師器	甕	土坑187	(20.2)	<7.9>		10YR8/4浅黄橙色	残存口縁1/8。胎土やや粗、0.5~3mmの石英・長石、1mm以下のチャート少量含。
18	須恵器	壺	土坑187	(24.4)	<6.2>		N6/0灰色	残存口縁2/5。胎土精良、1mm以下の白色砂粒少量含。
19	須恵器	杯身	土坑187	(10.8)	<4.6>		N6/0灰色	残存1/3。胎土精良、0.5mm以下の白色砂粒微量含。ロクロ右回転。
20	須恵器	有蓋高杯	土坑187	(10.0)	4.5		N8/0灰白色	残存杯部2/5。胎土精良、0.5~2mmの白色砂粒少量含。
21	土師器	高杯	柱穴391	(14.0)	<10.4>		7.5YR7/6橙色	残存4/5。胎土やや粗、0.2~6mmの白色砂粒・赤色砂粒多量含。
22	須恵器	杯蓋	柱穴391	(11.5)	4.7		N6/0灰色	残存1/2。胎土やや粗、0.5~3mmの白色砂粒多量含。
23	須恵器	杯身	柱穴391				N7/0灰白色	残存1/5。胎土精良、1mm以下の白色砂粒少量含。
24	須恵器	杯身	溝193	(11.4)	5.0		N5/0灰色	残存1/5。胎土精良、1mm以下の白色砂粒少量含。ロクロ左回転。
25	土師器	甕	土坑221 (竪穴住居189 貯蔵穴)	(12.8)	14.3		10YR7/2にぶい黄橙色	残存1/2。胎土精良、1mm以下の石英・長石微量、クサリ礫微量含。
26	土師器	甕	土坑221 (竪穴住居189 貯蔵穴)	(17.6)	<5.7>		10YR8/3浅黄橙色	残存口縁1/4。胎土精良、1mm以下のチャート・石英・長石少量含。
27	土師器	甕	柱穴198	(19.4)	<10.0>			残存口縁1/3。胎土精良、1~5mmの石英・長石微量、クサリ礫微量含。
28	庄内式土器	庄内型甕	竪穴住居243 床面	(15.4)	<2.0>		2.5Y3/2黒褐色	残存口縁1/10。胎土精良、0.5~3mmの石英・長石、角閃石・雲母含。生駒西麓産。
29	庄内式土器	庄内型甕	竪穴住居243 床面	(18.4)	<4.6>		7.5YR2/2黒褐色	残存口縁1/6。胎土精良、1mm以下の石英・長石、角閃石・雲母含。生駒西麓産。

※ 単位はcm。( )は復元数値、< >は残存数値。

No.	器種	器形	遺構/層位	口径	器高	底径	色 調	備 考
30	弥生土器	甕A	竪穴住居243 壁溝	(14.0)	<9.0>		7.5YR6/6橙色	残存1/8。胎土やや粗、0.5～2mmのチャート・石英・長石多量含。
31	弥生土器	鉢C	柱穴272 (竪穴住居243 主柱穴)		<2.1>	4.0	5YR7/4にぶい橙色	底部完存。胎土精良、1～3mmのチャート少量含。
32	弥生土器	蓋	竪穴住居243		<5.0>		7.5YR7/3にぶい橙色	残存1/2。胎土精良、1mm以下のチャート少量、0.5～2mmの石英・長石少量含。
33	弥生土器	高杯脚部	竪穴住居243				10YR8/1灰白色	残存脚部1/3。胎土やや粗、0.5～3mmのチャートやや多含。脚部b形態。
34	庄内式土器	庄内型甕	竪穴住居300 貼床	(14.6)	<3.7>		10YR3/3暗褐色	残存口縁1/8。胎土精良、0.5～2mmの石英・長石少量、角閃石少量含。生駒西麓産。
35	弥生土器	甕C	柱穴365 (竪穴住居300 主柱穴)	(13.0)	<10.2>		7.5YR5/3にぶい褐色	残存1/5。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート、0.5～3mmの石英・長石多量含。
36	弥生土器	広口壺	竪穴住居300	(15.0)	<3.5>		口縁部5YR6/8橙色 頸部7.5YR8/3浅黄橙色	残存口縁1/6。胎土精良、0.5～2mmのチャート・石英・長石少量、クサリ礫微量含。口縁部と頸部で粘土使い分け。
37	弥生土器	壺底部	竪穴住居300		<3.2>	3.0	7.5YR7/4にぶい橙色	底部完存。胎土精良、1～3mmのチャート少量、クサリ礫微量含。
38	弥生土器	甕C	竪穴住居242	12.0	<6.1>		7.5YR8/3浅黄橙色	残存1/5、口縁部完存。胎土やや粗、0.5～4mmのチャート多量、0.5～3mmの石英・長石少量、クサリ礫少量含。
39	弥生土器	鉢A	竪穴住居242	(15.0)	<7.8>		外面10YR6/2灰黄褐色 内面7.5YR7/4にぶい橙色	残存1/4。胎土やや粗、0.5～2mmのチャート多量、1mm以下の石英・長石少量含。
40	弥生土器	鉢E	竪穴住居242		<3.8>	3.6	7.5YR8/3浅黄橙色	底部完存。胎土粗。0.5～2mmのチャート多量、石英・長石少量、クサリ礫少量含。
41	弥生土器	器台E	竪穴住居242		<5.0>	8.0	7.5YR8/3浅黄橙色	残存2/3。胎土粗、0.5～3mmのチャート微量、0.5～2mmの石英・長石多量含。
42	弥生土器	皿形高杯A	竪穴住居242	(14.0)	<3.6>		5YR8/3淡橙色	残存杯部1/8。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート多量、石英・長石少量含。
43	弥生土器	甕B	竪穴住居250 床面	(15.0)		4.0	7.5YR7/4にぶい橙色	残存1/3。胎土粗、0.5～3mmのチャート多量、1mm以下の石英・長石少量、クサリ礫少量含。
44	弥生土器	甕底部	竪穴住居250 床面		<1.7>	3.4	7.5YR8/2灰白色	底部完存。胎土粗、0.5～3mmのチャート多量、1mm以下の石英・長石少量含。
45	弥生土器	壺	土坑233 (竪穴住居188 貯蔵穴)		<11.0>	4.0	外面10YR8/2灰白色 内面10YR5/1褐灰色	残存1/2、胴部以下ほぼ完存。胎土やや粗、0.5～4mmのチャート・石英・長石やや多量含。
46	弥生土器	皿形高杯A	竪穴住居216 床面	(20.0)	<3.0>		7.5YR8/3浅黄橙色	残存杯部1/8。胎土粗、1～3mmのチャート多量、クサリ礫少量含。
47	弥生土器	直口壺	竪穴住居246 床面	(9.0)	<9.6>		10YR6/2灰黄褐色	残存1/6。胎土精良、0.5～2mmのチャート少量含。
48	弥生土器	広口壺	竪穴住居246 下層	(20.2)	<4.2>		2.5Y8/2灰白色	残存口縁1/8。胎土精良、0.5～2mmのチャート・石英・長石少量含。
49	弥生土器	壺底部	竪穴住居246 床面		<2.4>	(3.8)	7.5YR8/3浅黄橙色	底部完存。胎土精良、0.5～2mmのチャート・石英・長石少量含。
50	弥生土器	甕C	竪穴住居246 床面	(14.2)	<6.7>		外面10YR4/1褐灰色 内面10YR6/1褐灰色	残存1/6。胎土精良、0.5～2mmのチャート・石英・長石少量含。
51	弥生土器	甕A	竪穴住居246 下層	(13.2)	<18.5>		10YR6/3にぶい黄橙色	残存1/2。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート多量、0.5～2mmの石英・長石少量、クサリ礫含。
52	弥生土器	甕A	竪穴住居246 下層	(16.8)	<7.8>		10YR4/2灰黄褐色	残存口縁1/3。胎土精良、0.5～2mmのチャート・石英・長石少量含。
53	弥生土器	鉢D	竪穴住居246 下層	(10.2)	10.8	4.8	10YR5/2灰黄褐色	残存2/3。胎土精良、0.5～3mmのチャート少量、0.5～2mmの石英・長石少量含。
54	弥生土器	鉢D	竪穴住居246 壁溝	7.0	7.0	3.0	10YR8/3浅黄橙色	完存。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート多量、0.5～2mmの石英・長石少量含。
55	弥生土器	皿形高杯B	竪穴住居246 下層	(22.0)	<5.0>		10YR8/2灰白色	残存杯部1/4。胎土やや粗、0.5～2mmのチャート多量、1mm以下の石英・長石少量、クサリ礫含。

No.	器種	器形	遺構/層位	口径	器高	底径	色 調	備 考
56	弥生土器	皿形高杯A	竪穴住居246 下層	(20.6)	<2.8>		10YR7/4にぶい黄橙色	残存1/10以下。胎土精良、0.5～2mmのチャート少量含。
57	弥生土器	器台C	竪穴住居246 下層	18.0	13.2	15.5	7.5YR8/2灰白色～ 5YR7/4にぶい橙色	ほぼ完存。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート・石英・長石少量、クサリ礫少量含。
58	弥生土器	器台B	竪穴住居246 下層	(17.4)	14.3	(15.0)	5YR6/4にぶい橙色	残存1/8。胎土やや粗。0.5～3mmのチャート多量、石英・長石少量、クサリ礫多量含。
59	弥生土器	器台B	竪穴住居246 下層	(15.4)	15.0	13.2	7.5YR7/4にぶい橙色	残存4/5。胎土やや粗、1～3mmのチャート多量、1～2mmの石英・長石少量、クサリ礫微量含。
60	弥生土器	広口壺	竪穴住居246	(10.0)	<4.2>		5YR7/6橙色	残存口縁1/3。胎土精良、0.5～2mmのチャート・石英・長石少量、クサリ礫少量含。
61	弥生土器	直口壺	竪穴住居246	(14.5)	<6.7>		外面5YR7/3にぶい橙色 内面10YR4/1褐灰色	残存1/2。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート多量、石英・長石少量、クサリ礫少量含。
62	弥生土器	鉢F	竪穴住居246		2.2		5YR6/6明赤褐色と 7.5YR6/4にぶい橙色	残存3/4。胎土精良、0.5～2mmのチャート・石英・長石微量含。2種類の粘土使用。
63	弥生土器	甕C	竪穴住居246	(12.0)	<7.0>		7.5YR7/4にぶい橙色	残存1/4。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート・石英・長石少量含。
64	弥生土器	甕C	竪穴住居246	(14.4)	<8.4>		10YR8/1灰白色	残存1/10。胎土やや粗、0.5～2mmのチャートやや多、石英・長石少量含。
65	弥生土器	甕C	竪穴住居246	13.6	<8.8>		7.5YR7/3にぶい橙色	残存2/3。胎土粗、0.5～4mmのチャート多量含。
66	弥生土器	甕A	竪穴住居246	(15.0)	<4.7>		7.5YR8/3浅黄橙色	残存口縁1/4。胎土粗、1～4mmのチャート多量、石英・長石少量、クサリ礫少量含。
67	弥生土器	広口壺	竪穴住居246	(17.2)	<5.7>		10YR7/2にぶい黄橙色	残存口縁1/8。胎土やや粗、1～4mmのチャート多量含。
68	弥生土器	鉢A	竪穴住居246	(14.0)	<6.0>		10YR8/3浅黄橙色	残存1/8。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート・石英・長石少量、クサリ礫少量含。
69	弥生土器	鉢A	竪穴住居246	(14.0)	<7.3>		10YR8/2灰白色	残存1/4。胎土やや粗、1～3mmのチャート、1～5mmの石英・長石少量含。
70	弥生土器	鉢A	竪穴住居246				10YR6/2灰黄褐色	残存1/10。胎土粗、1～4mmのチャート多量、クサリ礫多量含。
71	弥生土器	鉢B	竪穴住居246	(17.0)	5.6	4.0	10YR8/2灰白色	残存1/2。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート多量、石英・長石少量含。
72	弥生土器	鉢E	竪穴住居246		<3.4>	3.5	10YR8/3浅黄橙色	底部完存。胎土やや粗、1mm以下の石英・長石、クサリ礫多量含。
73	弥生土器	鉢E	竪穴住居246		<3.4>	5.0	5YR7/6橙色	底部完存。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート少量、0.5～2mmの石英・長石微量、クサリ礫微量含。
74	弥生土器	皿形高杯A	竪穴住居246	(22.0)	<2.8>		2.5Y5/1黄灰色	残存杯部1/8。胎土やや粗、0.5～2mmのチャートやや多量、石英・長石少量、クサリ礫多量含。
75	弥生土器	碗形高杯	竪穴住居246	(19.0)	<5.0>		10YR8/3浅黄橙色	残存杯部2/3。胎土粗、0.5～5mmのチャート多量、0.5～2mmの石英・長石少量、クサリ礫少量含。
76	弥生土器	碗形高杯	竪穴住居246				7.5YR8/3浅黄橙色	残存1/2。胎土粗、0.5～5mmのチャート多量、クサリ礫少量含。
77	弥生土器	広口壺	溝245	(13.0)	<7.3>		7.5YR8/4浅黄橙色	残存頸～口縁部4/5。胎土やや粗、0.5～3mmのチャートやや多、0.5～2mmの石英・長石少量含。
78	弥生土器	広口壺	溝245	(11.6)	<4.4>		10YR8/2灰白色	残存口縁1/3。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート少量、0.5～3mmの石英・長石多量含。
79	弥生土器	広口壺	溝245	(12.0)	21.5	2.0	外面7.5YR8/4浅黄橙色 内面10YR6/2灰黄褐色	残存3/4。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート多量、石英・長石少量、クサリ礫多量含。
80	弥生土器	広口壺	溝245	(14.2)	(24.8)	4.4	7.5YR7/6橙色	残存1/2。胎土粗、0.5～5mmのチャート多量、クサリ礫少量含。mmのチャート・石英・長石多量、クサリ礫少量含。

No.	器種	器形	遺構/層位	口径	器高	底径	色 調	備 考
81	弥生土器	短頸壺	溝245		<9.0>	3.5	10YR8/3浅黄橙色	残存1/2。胎土粗、0.5～4mmのチャート多量、0.5～2mmの石英・長石少量、クサリ礫少量含。
82	弥生土器	短頸壺	溝245	(8.0)	<12.5>		10YR8/3浅黄橙色	残存2/3。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート少量、石英・長石やや多量、クサリ礫少量含。
83	弥生土器	壺	溝245		<6.0>	3.0	5YR6/6橙色	残存1/6。胎土やや粗、1～4mmのチャート・石英・長石やや多量含。
84	弥生土器	鉢D	溝245	(5.9)	7.3	3.5	7.5YR8/3浅黄橙色	残存1/3。胎土精良。1mm以下のチャート微量、0.5～3mmの石英・長石少量含。
85	弥生土器	壺	溝245		<5.7>	3.6	5YR7/4にぶい橙色	底部完存。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート・石英・長石やや多、クサリ礫少量含。
86	弥生土器	壺	溝245		<3.0>	4.2	7.5YR7/4にぶい橙色	底部完存。胎土やや粗、1～3mmのチャートやや多、0.5～2mmの石英・長石少量含。
87	弥生土器	壺	溝245		<4.8>	(5.0)	7.5YR7/3にぶい橙色	残存底部3/4。胎土やや粗、1～4mmのチャートやや多含。
88	弥生土器	甕C	溝245	(12.0)	<5.8>		5YR6/6橙色	残存1/8。胎土粗、1～4mmのチャート・石英・長石多量含。
89	弥生土器	甕C	溝245	(12.0)	<4.1>		7.5YR6/4にぶい黄橙色	残存1/10。胎土粗、1～3mmのチャート・石英・長石多量含。
90	土師器	甕C	竪穴住居243 壁溝	(13.7)	<3.7>		口縁5YR7/6橙色 体部7.5YR8/2灰白色	残存口縁1/4。胎土やや粗、0.5～2mmのチャート・石英・長石やや多含。口縁部と体部で粘土使い分け。
91	弥生土器	甕C	溝245	(14.0)	<7.7>		5YR7/6橙色	残存1/3。胎土やや粗、1～3mmのチャートやや多、石英・長石少量含。
92	弥生土器	甕C	溝245	(14.0)	<7.5>		7.5YR8/2灰白色	残存1/10以下。胎土粗、0.5～3mmのチャート多量、石英・長石少量、クサリ礫多量含。
93	弥生土器	甕C	溝245	(15.0)	<8.0>		2.5Y8/1灰白色	残存1/8。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート多量、石英・長石少量含。
94	弥生土器	甕C	溝245	(16.0)	<5.0>		7.5YR8/2灰白色	残存1/10。胎土粗、1～5mmのチャート多量、1～3mmの石英・長石少量含。
95	弥生土器	甕A	溝245	(16.0)	<2.0>		10YR5/2灰黄褐色	残存口縁1/6。胎土やや粗、1～3mmのチャートやや多く含。
96	弥生土器	甕A	溝245	(16.0)	<1.7>		10YR8/2灰白色	残存口縁1/8。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート・石英・長石やや多含。
97	弥生土器	甕A	溝245	(16.0)	<2.4>		10YR8/2灰白色	残存口縁1/8。胎土精良、0.5～2mmのチャート微量含。
98	弥生土器	壺	溝245		<3.9>	3.4	10YR8/3浅黄橙色	底部完存。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート・石英・長石やや多、クサリ礫少量含。
99	弥生土器	鉢C	溝245		<3.9>	3.6	7.5YR7/4にぶい橙色	底部完存。胎土粗、0.5～3mmのチャート・石英・長石多量含。
100	弥生土器	鉢A	溝245		<1.4>	2.8	10YR4/1褐灰色	底部完存。胎土やや粗、1～3mmのチャートやや多量、クサリ礫微量含。
101	弥生土器	鉢E	溝245		<2.8>	4.2	7.5YR8/1灰白色	底部完存。胎土精良、1mm以下のチャート・石英・長石・雲母微量含。
102	弥生土器	鉢E	溝245		<3.0>	3.0	5YR7/6橙色	底部完存。胎土粗、0.5～3mmのチャート多量、石英・長石少量含。
103	弥生土器	鉢E	溝245		<5.3>	3.4	5YR7/6橙色	底部完存。胎土やや粗、0.5～3mmのチャートやや多含。
104	弥生土器	鉢F	溝245		<2.1>	2.0	7.5YR8/4浅黄橙色	底部完存。胎土やや粗、0.5～3mmのチャートやや多、クサリ礫少量。
105	弥生土器	鉢G	溝245	(7.0)	7.2	2.0	2.5YR4/6赤褐色	残存3/4。胎土粗、0.5～3mmのチャート・石英・長石やや多く含。
106	弥生土器	皿形高杯A	溝245	(18.6)	<10.5>		5YR5/8明赤褐色	残存1/2。胎土やや粗、1mm以下のチャート・石英・長石含。
107	弥生土器	高杯脚部	溝245		<9.8>	(15.6)	7.5YR8/3浅黄橙色	残存脚部2/3。胎土やや粗、0.5～2mmのチャート多量、石英・長石少量、クサリ礫少量含。脚部c形態。

No.	器種	器形	遺構/層位	口径	器高	底径	色調	備考
108	弥生土器	高杯脚部	溝245		<9.2>		7.5YR7/2明褐灰色	残存脚部1/4。胎土粗、1～3mmのチャート多量含。脚部c形態。
109	弥生土器	高杯脚部	溝245				杯部7.5YR8/1灰白色 脚部2.5YR7/8d橙色	残存脚部1/2。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート・石英・長石やや多含。杯部と脚部粘土使い分け。脚部b形態。
110	弥生土器	器台D	溝245				10YR7/2にぶい黄橙色	残存1/4。胎土やや粗、0.5～5mmのチャート多量、1～2mmの石英・長石少量含。
111	弥生土器	器台C	溝245	(15.2)	<10.0>		7.5YR8/3浅黄橙色	残存2/3。胎土粗、1～3mmのチャート多量、石英・長石少量、クサリ礫微量含。
112	弥生土器	器台C	溝245	(18.0)	<1.8>		7.5YR8/4浅黄橙色	残存1/10以下。胎土やや粗、0.5～2mmのチャートやや多量、クサリ礫多量含。
113	弥生土器	器台C	溝245	(19.0)	<3.0>		10YR8/2灰白色	残存1/8。胎土精良、0.5～2mmのチャートやや多、石英・長石少量含。
114	弥生土器	器台C	溝245	(20.2)	<2.9>		7.5YR8/2灰白色	残存口縁1/4。胎土やや粗、0.5～3mmのチャート多量、クサリ礫少量含。
115	弥生土器	広口壺	柱穴320	(18.0)	<8.0>		5YR7/4にぶい橙色	残存頸部～口縁部3/4。胎土精良、0.5～5mmのチャート少量、クサリ礫多量含。
116	弥生土器	甕C	柱穴322	(13.4)	<4.5>		10YR7/2にぶい黄橙色	残存1/5。胎土やや粗、0.5～1mmの石英・長石多量含。

表4 石器観察表

No.	種類	遺構	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	備考
117	石包丁	溝185	<72>	<47>	7	34	粘板岩	
118	大型蛤刃石斧	溝178	<74>	<54>	24	70	ヒン岩	
119	敲石	竪穴住居246床面	<7.7>	39	14	62	片岩	磨製石器転用か
120	敲石か	竪穴住居246	41	32	29	48	ヒン岩	
121	敲石	竪穴住居246下層	133	29	12	88	片岩	
122	砥石	竪穴住居246下層	<97>	<34>	38	167	砂岩	
123	砥石	柱穴364(竪穴住居246主柱穴)	<54>	<55>	11	33	砂岩	
124	砥石	竪穴住居242	<96>	<73>	16	160	砂岩	
125	砥石	竪穴住居188	<125>	<93>	9	144	頁岩	
126	石皿	溝245	119	92	16	243	砂岩	
127	石皿	竪穴住居246床面	<370>	166	120	8500	砂岩	

※ < >は残存数値。厚さは最大。

## 5. まとめ

今回の調査では、弥生時代後期から近世に至るまでの遺構または遺物を確認した。中でも、竪穴住居は、弥生時代後期から古墳時代後期に至るまで、途中時間的な空白があるものの、計18棟を数え、活発な土地利用の状況を物語っている。調査地周辺では、近年発掘調査が相次ぎ、当該期の歴史の変遷が徐々に明らかになってきている。ここでは、付近の調査成果を踏まえて、当調査地の変遷を述べる（図39・40）。

第3期においては、住居246の床面で検出した柱穴320・322から弥生時代中期後葉から後期前葉に位置づけられる遺物が出土しており、生活の痕跡が確認できる最初である。次いで、住居246が成立するのは、床面から出土した土器から後期中葉と考える。溝245からも、わずかに同時期の遺物が出土していることから、住居246と併存していた可能性は高い。溝245、住居246ともに、土器の出土状況と遺構の埋没状況から、後期後葉に人為的に埋められていることがわかる。この時期以降、庄内式併行期に至るまでが、最も出土する遺物量が多く、調査地周辺での活発な活動が窺える。溝245が埋められた後、住居242が成立するが、住居250・216・188も建物方位、規模、出土遺物の年代観などから、同時期に併存していたと考えられる。その後成立する住居300・243にも、あまり時期差はない。住居300・243は、規模、方位、構造などから併存していたと考えられる。古墳時代前期までに成立した住居の特徴として、白色粘土塊を住居床面に有するものが多い。白色粘土は、周辺では見られないものであり、土器製作用の粘土の可能性も考えられる。

庄内式併行期以降、古墳時代中期（第2期）に至るまでは、遺物、遺構ともに希薄であるが、

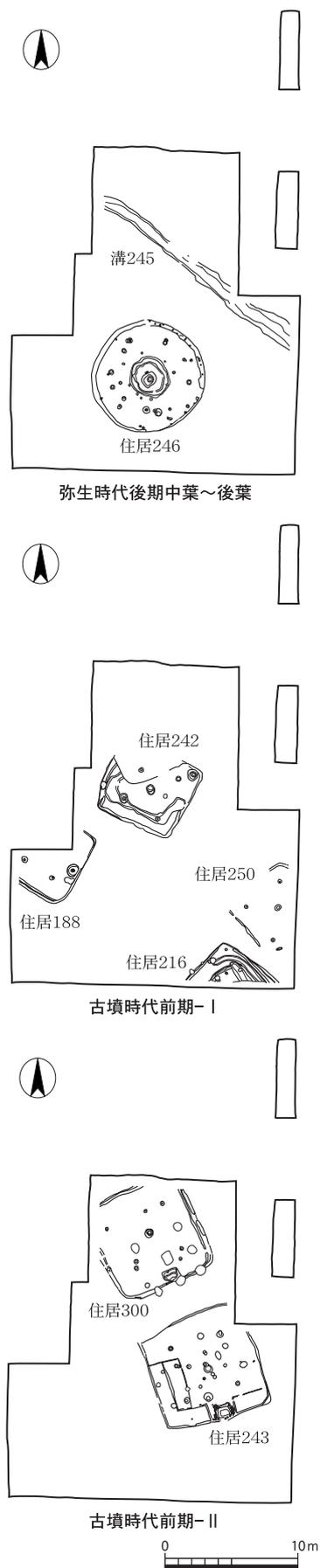


図39 第3期遺構変遷図（1：500）

5世紀中葉に至り、再び集落域に組み込まれ、小型の竪穴住居189・215が成立する。建物1も竪穴住居の主柱穴と考えられ、規模、方位から当時代に比定できる。続く5世紀後葉から6世紀初頭は、周辺域を含めて再び活発な活動が見られる時期である。重複関係から溝186に先行する建物3と、建物2が成立する。構造から両者とも倉庫の可能性が高い。次に、周溝をもつ住居192が成立し、溝186・土坑187からは遺物が多量に出土している。

また、北西部にのみ包含層が存在し、溝245をはじめ、溝186や住居192の周溝である溝193が北西方向に向かっているのは、その方向に谷状の落ち込みが存在していたことを示唆するものである。

その後、第1期に至り、奈良時代と考えられる溝177・178が築かれる。東西方向に並行する溝は、土地を区画するための溝、または、道路状遺構の側溝とも考えられるが、詳細は不明であり、近隣の調査を待ちたい。平安京域に組み込まれた後は、遺構・遺物ともに生活の痕跡は希薄である。中世には耕作地になっており、現代に至るまで耕作地として利用されていたことがわかった。

今回の調査により、西京極遺跡内の歴史の変遷がより明らかになったといえるが、未だ点と点の調査が多く、全体では不明な点も多い。西京極遺跡は、平安京域の中で、平安京以前の京都の姿を明らかにできる重要な遺跡であり、今後の調査に期待したい。

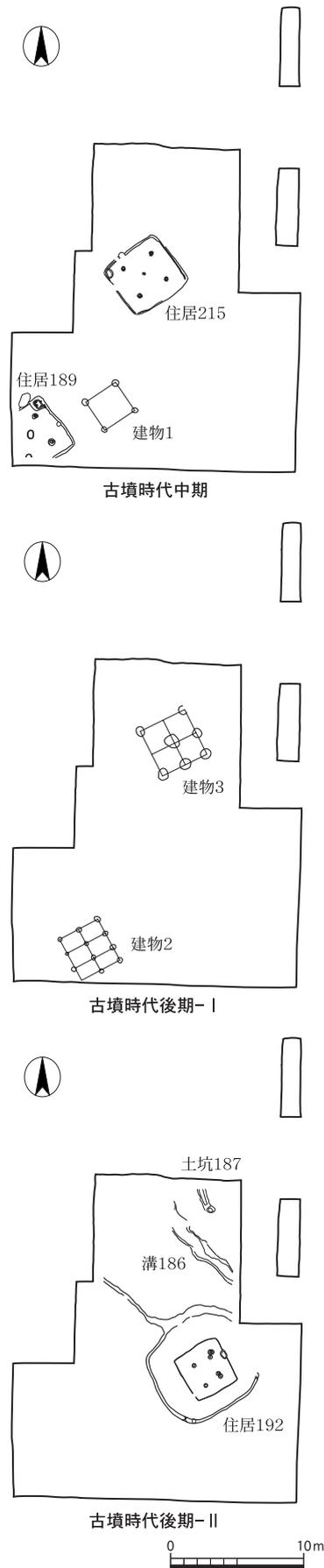


図40 第2期遺構変遷図(1:500)



# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうごじょうしぼうろくちょうあと・にしきょうごくいせき							
書名	平安京右京五条四坊六町跡・西京極遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2007-20							
編著者名	西森正晃・柏田有香							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2008年4月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 ごじょうしぼうろくちょうあと 五条四坊六町跡 にしきょうごくいせき 西京極遺跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 さいいんやすづかちょう 西院安塚町  100番	26100	931	35度 00分 00秒	135度 43分 19秒	2008年1月 21日～2008 年3月19日	415㎡	マンション 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西京極遺跡  平安京右京 五条四坊六町跡	集落跡	弥生時代後期 ～古墳時代前期	竪穴住居、溝	弥生土器、庄内式土器、石器				
	都城跡	古墳時代中期 ～後期	建物、竪穴住居、溝、土坑、柱穴	土師器、須恵器				
		奈良時代 ～平安時代	溝、柱穴	土師器、須恵器、緑釉陶器				
		中世	耕作溝	磁器、輸入陶磁器、瓦器、瓦質土器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-20  
平安京右京五条四坊六町跡・西京極遺跡

発行日 2008年4月20日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 TEL 075-256-0961